

自動車くるまが何處へ行つたか。そしてどんな種類の家の前に止つたか、それからどんな情景が展開されたか。それを僕は知りませんが、翌朝女は心持蒼い顔で男に云ひました。

『妾ね、完全に五頁廣告を貰ひましたわ』
ざまをみるつて型です。この勝負完全に男が、ノックアウトされた様でした。

然し僕は最後に付け加へませう。女はそれから一週間程して〇〇病院へ入院するハメに立ち至つたことだけです。

どうして、何が彼女を、そんなこと僕は一寸も知りません。只在つたことだけを。

たんかをきつてくわうこくをもらつた男の話

あつさりと申上げます。この男はズブの素人だつたんです。

所は某出版屋の店頭。これで男は四度もこゝへ足を運んだのです。足で廣告を取る。この原則尤もだなアと男は考へてました。がもういゝ。百圓で一頁今さつき電話で決めたんだ。そして今原稿を取りに來たんです。

處がです。もう少し待つて呉れと云ひ出したんです。その本の著者が男の社の幹部と知り合ひだからと云ふのがその理由でした。幹部に話して料金をネギラウと云ふのがその腹です。宜しい。男は憤慨しました。何のために四度も足を運ばしたんだ。足で廣告を取る。こんな原則なんて犬に喰はれる。そこで男は吠えたもんです。

『宜しいです。もう締切も過ぎたんですから。例へ社長から話が有つたつてどうせ廣告部に相談があるんです。廣告部としては、そんな情實關係はかまつちやあゐられませんか。僕もこゝまで來たんだから十圓位なら僕の一存で今此處でお負けしませう。兎に角、廣告つて奴あスベースの問題が大切ですからね。いや失禮しました。それぢやあ』

男が聲に抑揚を付けて、感情的に云つたことは勿論です。でそれから何のことはありません。一時間許り経つと電話で宜しく頼むと云つた譯だつたんです。

へんしうぶなんてどうにでもなるよと云つた男の話

御存知でせうか。その記事廣告と云ふ奴を。あいつは非常な効果があるもんなんです。で廣

告主はいつでもあれを望むんですが、仲々オインレとは行かない。

こゝに一人の男がありました。廣告主では金は可成り出すと云ふんです。どうかして記事廣告を出してやりたいと考へました。買収、買収に限る。そこで廣告主と男は示し合ひました。

ある日男は編輯部の幹部二三人をうまく誘ひ出しました。行く先はセキハン。綺麗どころを三四人入れての遊び。其處へ廣告主の出現。さて話が何處へ行つたか。細工は流々です。席を變へて飲み始めて、とどのつまりは某所へシケ込んだ譯。この費用締めて百五十圓也。勿論廣告主の懐からです。

次の號あたりにその記事廣告が出たのをみれば、もう説明の要はありませんまい。

『テモ怖しきは酒と女』か。

『いや、それよりも編輯者よ、君の權威は何處へ行く。』

27 チャーナリスト給料不拂物話

提灯チャーナリズム

現代はチャーナリズムの天下だ。

前ロンドン「ネーション」の主筆、故マツシソングムが叫んだと云ふが、まさしく最早新聞なしには「政府の政策も行はれず、戦争も出来ず、平和も保てず、株式の賣買も出来ず、選挙も争へず、會社も組織され」ない。チャーナリズムの社會的侵透力、大衆支配力は、今や封建時代の絶対專制王侯とも及び難い。世は擧げてチャーナリズムの天下だ。

だが、チャーナリズムが例へどんな權威を擅まにしようとも、従つてチャーナリストが社會

の上に支配的に君臨してゐると云ふ證明は、悲しい哉、東京の眞中を流れる堀割のどぶ泥の中を掻き廻しても一寸見つかるものではない。

『中野区に回響ン中野田ノ噂傳ノ力國中皆々々 露ニヨリテ露露ノ露マナニイタタ』

近代的科學の威力を誇るかに廻轉する電光ニュース、一時間十二—三萬枚の超高速度輪轉機のうち、併し、その機械の陰に機械に追ひ廻されて汗するデヤーナリストは餘りにも惨めな存在である。月給六十圓——六十圓前借すると残月給ゼロ、月給がゼロになつたからアト十五日を働きません、では輪轉機が彼等を許さないだらう。彼等はゼロになつた月給の爲に、オール一ヶ月を一〇〇パーセントに働かねばならない。彼等の上に眼を光らし、怒號し、噓をする社會部長、整理部長、更に編輯長、主幹等々は、十二萬超高速度輪轉機と、電送寫眞機と、飛行機と、電光ニュースと、それ等と同じ動力によつて跳ね動く人間ロボットだ。彼等の體内を駆け巡るものは、血ではない。十二萬超高速度輪轉機に通じてゐる同じモーターから送り出される電流だ。原稿をカットすることから必然に覺えた首のカットで、この人間ロボット君デヤーナリスト間に權勢を有する。

デヤーナリストはかくて黒金の機械に鞭を打たれる悲しむべき存在ではある。

しかし十二萬超高速度機、電送寫眞、飛行機、電光ニュースに追ひ廻されるデヤーナリストは、そのこと自身の故に、所謂第三期資本主義一九三二年下に羨望さるべき辛運を擔つたデヤーナリストである。何となれば、電光ニュースに歡喜の涙したウエイトレス諸嬢は、彼等が電光ニュースの奴隷であるが故に、その故にのみ、双手を舉げて迎へるだらうから——。

だが同じデヤーナリズムにもピンからキリまである。新時代の王者——十二萬超高速度輪轉機や、電送寫眞機や、飛行機を迎へ後れたデヤーナリズムは、同じデヤーナリズムでも提灯に釣鐘だ。政府の提灯なしには、百貨店の提灯なしには、選舉立候補者の提灯なしには、會社の提灯なしには、その經營の維持は困難である。「提灯デヤーナリズム」なる名稱の有るか無きかは知らぬ。たゞ、デヤーナリズムの權勢下に最も悲惨を極めるデヤーナリストは、實にこの「提灯デヤーナリズム」下の記者大衆であらう。彼等は、ネオンの下にネオンにも増して輝やくカフェーガールにも、電光ニュースの奴隷でないばかりに喜び迎へられない。のみならず彼等は前借すべき月給をも有たない。何とならば彼等の月給五十圓也は、丁度その社の株式公稱

資本金××萬圓の如く、公稱月給に過ぎないからだ。彼等の頭上には月給不拂のアラモードがある。

新聞記者はところてん

嘗つて中央新聞に吾が國最初の、而かも珍らしく組織的な新聞記者ストライキが起つたことがある。ストライキは労働者にのみ用のあるもの、サラリーマンには殊に「無冠の帝王」ジャーナリストには用のないもの、この發達せるジャーナリストの常識は見ん事裏切られた。中央新聞編輯局員三十餘名は、労働者を凌ぐガツチリとした團結力で一ヶ月の持久戦を闘ひ抜いた。その原因が月給不拂、而かも三ヶ月に亘る月給不拂にあると聞いて、各新聞社のジャーナリストは、他人事にあらずとばかり、ドル入れを倒さにして應援資金を送つた。それは昭和二年の金融恐慌の直後だつた。「他人事に非ず！」ジャーナリストの第六感は矢張り鋭い。中央新聞の三ヶ月の給料不拂ひは、その直ぐ後には既に彼等自身の問題だつた。彼等の拂込濟み月給は、今や公稱月給に轉化したのだ。

月給不拂ひは今やジャーナリズム戦線に横行濶歩してゐる。

中央新聞ストライキが、負けは負けだが不拂給料の金額を取つて解決し終つた頃には、萬朝のジャーナリスト諸君が同じ問題で騒ぎ立つてゐた。かと思ふと、三十日が來たのに「やまと」のタワリシチも、銀座裏に彼女との逢ふ瀬を楽しむことの出來ない自分を發見せざるを得なかつた。給料不拂のバチルスは、かくて社から社へと、ジャーナリズム戦線を傳播した。中央から萬朝へ、大勢へ、やまとへ、二六へと、その蔓延の手はまさにボルシェヴィキの赤化よりも凄まじい速度であつた。

「手めえたち新聞記者はところてん見てえなもんだ。アトから押せばいくらでも出て來る」
これは毎夕社長木村政治郎閣下のあまりにも有名な御託宣だが、この御託宣は社長から社長へとその脳髓に喰ひ入つた。

「記者には月給を拂ふ必要はないですな」

「さうですとも、月給を拂ふ位なら妾を三人餘計に圍つた方が有益です」

「私のところでも拂はないことに決めました。嫌でやめて呉れよばどん／＼新しいのが又たど

で働いて呉れますからな」

と相談したかしないかは、彼等の行きつけの待合に行つて聞かなくては分らないが兎に角給料不拂はそれ以後益々甚だしく、今やチャーナリズムの新傾向だ。獨逸シーメンス・カロールステレフンケンの電送寫真機かせめては八萬高速度輪轉機でも備へてあるハイクラス新聞社でもない限り——新聞記者志願者よ氣をつけ給へ——現代チャーナリストたらんとするものは、めしを喰つては資格に缺ける。

織り出された人生悲劇

めしを喰はぬチャーナリスト——だが現實はそんなユーモアばかりを生むものでない。中央新聞の整理部に働いてゐた一記者の上に起つた話だが、彼は打續く給料延滞分割支拂ひに、妊娠してゐる妻を養ふ自信を失つて、彼女を實家に歸省させた。そして、彼れは一人残つて家を引拂ひ、友人のところへころがり込んだ。郷里で妻は分娩した。分娩したと同時に彼女は死んだ。彼れは大至急郷里までの旅費と葬式費用の一部でも調達しなければならぬ。社に泣き込

んでも金を出さない。と云つて長い給料不拂ひに質には既に入れ切つたし、友人知己は殆んど利用し盡した。五圓と纏つた金も彼の手に握めなかつた。血眼で百方奔走する中、夏のことだ。郷里では葬式を出して了つた。妻が、しかも妊娠した揚句死んだと云ふに歸省せぬ婿は人間でない、純朴な田舎の人は喚き立てゝゐる。彼は遂に歸省する機會を失つた。彼は悲嘆の餘り死を決意した。死は友人の勸告で果さなかつたがその後暫く彼は考へることを休止した人間のやうだつた。

これ程ではなくともこれに近い例はいくらでもある。萬朝にも——やまとにも——。

近くは「婦××日」の話だが××部の某は同社創刊以來勤續してゐる老人で、男の子と二人の孀暮しをしてゐたが、給料不拂ひとなつてから、家賃を拂はぬので借家を叩き出され、止むを得ず息子を連れて去年の暮以來、木賃ホテルを住居としてゐた。遂ひに新聞が休刊して、いよ／＼全く一文の収入をも失つて、彼は遂に背に腹は代へられず數回××して遂に×はれた。彼は嘗つては某大會社の課長をしてゐたことのある法政大學出の男である。

かくて第三期以下（と云つても梅毒ではない、同じやうなものだが資本主義の第三期だ）の

チャーナリズムは到るところに人生の悲劇を織り出してゐる。

「困つてゐるのは社員ばかりぢやない。社そのものが困つてゐるのだし、社長のわしだつて君等とちつとも異つちやゐない」

社長閣下は不平社員に詰られる度にかく宣ふ。成る程次第に減つて來た發行部数は、次第に廣告行數をも減らし、廣告収入は更に減少させる。そして社の收支決算は赤字でなかつたことはない。「成る程なア」と感心したら、君よ君は善良な「提灯チャーナリスト」だ。「提灯チャーナリズム」が成立つのは、その提灯のお蔭であるが、提灯収入と云ふものはプライヴェートのみ社としては非合法的にのみ這入つて來る。そんなものを收支決算の上に計上する社長閣下は例へ第三期（今常こそは梅毒のだ）が腦へ來たところで何處にも居はしないのだ。考へても見よ！ 損をする爲めに、誰が新聞經營を續けるか――。

日傭チャーナリスト

我がチャーナリズムの上に、この給料不拂が始まつた當初は、流石に第六感の發達したチャ

ーナリスト諸君も、急に豫想しなかつただけに、個人生活の上で相當手ひどい打撃を受け、社に對しても可なりに反抗の氣勢を示した。だが今やそれが慢性化すに到つては、チャーナリスト自身もやむを得ず泣寝入りの状態だ。

彼等の月給金五十圓也、四十圓也は何時の間にか頗る當然のこのやうに、公稱月給金とはなつて了つた。彼等の生命を維持するところの拂込月給は、今や實のところ拂込日給だ。一日五十錢、一日一圓程度宛握らされて「おい、コーヒー飲みに行かう」と云ふ彼等は、まさしく日傭チャーナリストと云ふに相應しい。それも毎日はない。二日に五十錢か一圓はいゝ方だ、三日に五十錢と云ふのも決して珍しくはないのである。而かもその五十錢も、編輯の會計交渉委員がさんざ會計のおやちと卓を叩いての喧嘩口論の末である。

何時であつたか筆者が×朝の編輯室を訪れた時、編輯局員は不平滿々として羊羹を頬ばつてゐた。

「今日の月給は羊羹だ。なめてやがる」

聞けば、けふは金が無いが羊羹を貰つたからこれで我慢して呉れと云ふのださうだ。

×夕では毎月末、編輯局有志を糾合して月末新撰組と云ふものが組織される。この社は給料不拂にまでは未だ發展しないが、その月内に支拂はれるとしても三十一日の午後十二時にならねば駄目だし、若し請來の手を緩めたら翌月に廻されて兎もすれば給料不拂に發展しさうだ。月末新撰組は之れに備へて月末近くなれば、既に早くワイワイ騒いで給料不拂を未然に防ぐ役割を努める。

目下休刊しつゝある婦××日では、去年十月以來給料不拂ひの上に、必ず支拂ふと云つた十二月の大晦日に、成る程支拂ふことは支拂つたが、二人頭タツタ三圓であつた。爲めに専務取締役はぶん殴られ、社長室の大机は眞逆様に引つくり返された。

一日五十錢乃至一日の日傭チャーナリストも、しかし街頭に満ちあふれる失業チャーナリストを見ては、未だしも自らの幸福を思ふて現状に満足しなければならぬ。「おいコーヒー飲みに行かう」

一日五十錢の給料も、彼等にコーヒーを恵むのだから——。しかしそれも氣輕な獨身者なればこそその世界だ。一人前の人間ならば、喫茶店のマドモアゼ

ルに戀もする。戀をすれば結婚もし度くなる。結婚をすれば愛の結晶——おお呪ふべき結晶よ——とても生まれもする。

かくては一日五十錢の給料は絶対にコーヒーをも恵まぬであらう。彼等の行く先きは？。しかし、名將の下に弱卒なしの譬、社長が、提灯と脅喝その辣腕を揮ふ通りに次第に彼等もこれを倣ひ進む。

サラリーマン・チャーナリストはかくて日傭チャーナリストから聽てルンペン・チャーナリストへ——。

現に×××、××等の新聞社は、その記者採用にあつて、『月給は拂へぬが、紙面を利用して勝手に儲けてよし』なる奇怪な條件をつけてゐる。

小新聞の今日は中新聞の明日

チャーナリストが「社會の木鐸」たり「無冠の帝玉」たりし時代は、既に遠く過ぎ去つたことは、誰しも今や認めるところだ。しかし斯くまでに甚だしい虐待下に押しひしがれてゐやう

とは、よもや、世の誰もが氣のつかないことであつたらう。而も世は擧げてチャーナリズムの天下だ。チャーナリズムはあらゆる機械發達の威力の上に、どつかと足をおろして、更に今や航空をも征服しつゝある。しかり！ またその故にこそ、十二萬超高速度輪轉機と、ベラン式電送寫眞機と、電光ニュースと、あらゆる新科學的機械に追ひ退けられて、時代の流れの外にその殘骸を止めてゐる多數の小新聞に於て、その勞力の當然の報酬をも得られぬ多數のチャーナリストがその方向を失つてゐるのだ。

煙突上に餓死せんとする日本製絨の爭議團員に、その紙面の上で、まことしやかに同情しても、近代チャーナリズムは、自らの足下に死せんとする多數のチャーナリストには一顧だもせぬ。

給料不拂のバチルスは更に更に擴大するだらう。

給料は殘ゼロとなつても前借の出来る中新聞のチャーナリスト諸君、大資本は超高速度輪轉機と、飛行機と、電送寫眞と、電光ニュースと凡ゆる科學的新武器で、チャーナリズム戰線を征服し盡さうとして睥睨してゐる。小新聞の今日は中新聞の明日だ。

給料不拂の火の手は今や諸君の殿堂を甜めようとしてゐる。

28 誤字ナンセンス

或る時、或る處の試験で假名文字を漢字に書き替へる問題の一つに「しんしんくじよ」といふのがあつた一人の受験生は「ナアーンだ。こんなもの」をと一氣呵成に答案を書いた。あとで試験官がその男の答案を見ると「伸士縮女」の四文字が元氣に躍つてゐた。伸び上つてゐるが故に伸士といひ常に縮んでゐる女性なるが故に縮女と書く――、皮肉ではなく本統に彼は然う考へて書いたのであつた。

だがこの受験生を笑つてはならない。文字を商賣にしてゐるチャーナリストの中にも、これ以上の珍字、誤字を創作して平氣でゐる者が少くないのだから。

尤も、珍字誤字の中にも、如何にも尤もらしいものもあつて、思はず吹き出させられることがある。まづ一應理窟のある誤字を書き出して見よう。

「意味深重」——意味が深くて且つ重いといふのだ。なるほど、筋は通つてゐるやうだが、この場合、重い軽いといふ重量は問題ではなく、長いか、短いかといふ距離が眼目であることを造語者は忘れてゐたのだ。深く重しではなくて深く長しでなければならぬ。

「意氣昇天」——意氣旺んにして天に昇るといふのだ。しかし、只だ昇るといふだけでは、いさゝか意氣阻喪の嫌ひがある。須らく天を衝くの概がなければならぬのだつた。

「寒冒」——寒さを冒すから風邪を引くのだといへば理窟は通る。しかし、實際は、風邪は冒されたと感じて始めて罹るものらしい。

「海老同穴」海老のやうに腰の曲るまで、同穴の契りを結ぶものと考へたのは考へすぎた。實は、偕老でなければならぬ。

「異句同音」——文句は異つてゐても——と思つてさう書いたんだ。文句はあるめいと啖呵を切つても、通らぬ。異句同音が正しい。

「危機一發」——轟き亘る銃聲一發、危機は來た。……てな活劇的のシーンを連想して書いた文字だらうが。間一髪といふところに危機は來る。

「危禍」——危いところで禍に出會したのだから、危禍でよささうだが奇禍が正しいといふ。奇妙な事だが仕方がない。

「臥薪嘗炭」——薪と炭とは親類筋だ。薪に臥る代りに、炭を嘗めて置けば雑作は要らぬところだが、支那人は炭を好まぬと見えて膽を嘗めねば承知しない。

「換骨脱胎」——骨つき屋ならぬ骨の入換へのついでに、胎も脱いでくれると思つたのが抑々の誤り。骨つき屋は、資本家のやうに胎を奪つて返してはくれぬのだ。

「五里夢中」夢心地で彷徨したといふのに何の間違ひがあらうといひたいが、この熟語の原作者は夢を見た事がないと見え、霧中と書いてゐる。尤も夢が五里もつゞくといふのもチト變ではあるが。

「妻君」——妻たる君よ！ でよかりさうなものを細き君よ！ でなければならぬとするのは時代遅れだなどと、いひ給ふなかれ。現代はむしろ「太き君」と書くこそ、相應しかるべきを。

「水瓜」——水分の多い「すいくわ」なれば、水瓜でよかりさうだが之は西國の産なるが故に西瓜と書くのが禮儀の由。

「切角」——角を切つては、せつかくの角が臺なしになる。まづ角は折る程度にか。

「前後策」——あとさきの策を考へるのだが前の事は最早考慮の必要がない。只だ後の事のみ善く考へよとあつて「善後策」と書くのが正しい。

「晴天白日」——天が晴れたらそれでよかりさうなもの、矢張り天の色を表して「青天」とせねば通らぬさうな。

「短刀直入」——エイと許り短刀を突き刺すやうにやるからこの語句があるのだと思つたら、刀の長短は問題でなく、刀の單數であることが必要條件であつた。單刀直入と書かねばならな

い。多少の縁——電車の中で海老茶袴に觸れたのも多少の縁と思つたが、さにあらで他生の縁でなければならぬとは、テモ、抹香臭い文字だ。

「燈下親む」——十六燭光の瓦斯入電球の下で——と思つたが、上下は問はず燈の火でなけれ

ばならぬさうな。

「人面獸身」——これは痴漢だけの形容詞になら通らうが、本當のものは獸心でなければならぬといふ。

「行路病者」——路傍で倒れ込んだ病者ではあつても、旅の空での事であれば「行旅病者」と書かねばならない。等、等、等。

29 新聞社入社試験物語、受験心得の巻

新聞社への入社志望者はまだ毎年増えて行く一方である。だが新聞社の方では昔程は新記者を採らなくなつた。入社試験は勢ひ猛烈な競争を演ずるわけである。左に大新聞數社の有力試験委員を通じて得た入社試験に就ての心得、感想等を綜合して記して見る。これは單に後に來

る者の参考になるのみでなく、一つの社會事象として興味もあり、注目もすべき問題でもあらう。

X

先づ試験に望む前の準備である。各社とも筆記と口述とで、筆記は作文、單語、並に外國語を普通とするが、これ等を通じて試験委員は一體何を聴かうとするか？ 問題は先づこゝにありだ。

第一に謂ふまでもなく常識である。常識は常識でも要求するところは確實な常識である。たとへば、今年の時事の單語中のリトヴィノフをたゞ、ロシア外交官と書いたり、朝日のウナを單に電報の略語と記したりする類の、大體當つてはゐるが極めて漠然としてゐる程度の知識は實際活動の上に碌な役に立たないわけである。だがかうした問題に對する正確な理解は、かなり緊張した日常の注意力の集中からのみ生れるものである。試験前一週間位、モダン語辭典か何かを始めから終りまでひつくりかえして單語の暗記にとりかゝつたところで習得し得る體のものではない。

第二に飽くまで現代的教養が必要條件である。今年の各社の試験問題を見てもわかるやうにそこには所謂近代的な新聞常識が百%に溢れてゐるが、たとへば、故事熟語といった風の封建的教養は一つも姿を見せないのである。

だが單なる銀座的モダンボーイの教養からは、たとへば、オンパレードやドリブルなどは答へられても新平價、免稅點、米價基準、五大電力、スパイ政治などは答へられない。つまり毎日の新聞紙の注意深い觀察ばかりでなく月刊雜誌などを氣をつけて讀んでゐないとはつきり知り得ないやうな現代的教養が必要視されてゐるのである。新聞は過去及び現在の新聞紙の上の知識ばかりでは決して作つて行かれないのである。雜誌及び書物による廣汎にして相當の深さをもつ知識が絶えず必要なのである。尤もひどく専門化した現代の新聞記者にあつてはその専門の分化が著しいだけに、かなり馴れた記者でも受持が變るとその領域で暫く見習ふ期間を必要とする程になつてゐるが、それだけに一般的な常識とのつながりは逆に益々必要となつて來つゝあることを忘れてはならない。

第三は應用融通の習熟である。昔風の云ひ方で所謂頓智の才と云ふのであるが、これは持つ

て生れた才とのみ云ふのは間違であつて、極めて科學的に計畫的に頭腦を働かせることから得られる後天的な習慣性とも云ふべきものである。一つの仕事なり事件なりにぶつつかつたとき多くの障害にも拘はらずその目的を達する捷徑を如何に早く見つけ出すかである。ラヴリンス(迷宮)の遊戯などこれを形象したものであるが、記者が事實に當面するのは極めて複雑な場合なのであるから、百分の應用、融通の才能を發揮することが現實に必要となるのである。

入社試験の場合には、外國語の邦譯のやうな際に、一二の知らない單語があつたにしても全體から推察して、文意の通るやうにまとめ得るかどうかなどが適例である。悪く云へばどう胡魔化すかがあるが、科學的の推理から考察してかゝれば、丁度精密な科學的觀測による熟練した天氣豫報のやうに、適中の比率も多くなるわけである。

第四には、ものごとに対する立體的な理解である。つまり、一つの事件なり、物語なりの重點はどこにあるか、何が根幹で、何が枝葉なのであるか、を早く見分けて、不必要な部分を忘れても、根幹となる重要な部分を正確につかむ練習をすることである。

誰が Who?

何を What?

何時 When?

何處で Where?

如何に How?

といふ風に組織だつて考察する習慣をつける事は、何でもないやうで仲々出来ないものである。

大抵の新聞社では、時事問題に就て、試験委員が、まとまつた論文か、物語かを朗讀し、これを一定の時間にまとめさせるやうであるが、これは右に述べたやうな立體的な理解力と重要數字などに對する記憶力とを試す爲めである。これが要領よく出来ない、さし當りインタービューなどに行つても、丸で要領を得ないか、或は出鱈目を書くといふ怖れがあるといふことになるのである。

X

以上は大體に於て、筆記試験を中心として筆を進めたわけであるが、口述試験になると、事

は極めて簡単な如くして實は仲々複雑を極めて來るのである。

といふのは口述試験は單に知識を試みるだけでなく、所謂人物を考査するのだからやかましいわけである。一口に人物と云つても、試験官が永く交際したり、訓育したりしたわけではない。先づ殆ど完全に初対面であり、しかも數分間の間に折紙をつけるのであるから、つまり「初めて遇つて話した時の感じ」といふ恰度見會ひのやうな具合である。これは十人十色、百人百色で、どうにもならない部分が凡そ八〇%を占めるわけであるが、こゝには極めて概略であるが、現代の新聞人は如何なる人物を必要とするかについて書いて見る。自分の性格や特徴と思ひ合はせて見れば何等かの形で参考になる筈である。

第一に身體強健らしきこと。らしいとは何だ！と詰問されるかも知れないが、本當に強健でないものは、勿論身體検査ではねられて了ふ。——尤も、或社によつてはその試験醫が自分の出身校以外の受験者で有望な者を病氣と診斷して落としたりとか云ふ噂もあるが、そんな場合はあつたにしても極めて稀のこととしておかう——たとへ實際に強健であるにしても外面極めて貧弱な容姿をしてゐてはいけないといふのである。一定の時間に一定の問答で、全部を見極

めようとする試験委員は、たとへ眼光服背を徹する覺悟でゐても、相手は多數で疲れもする、勢ひ表見的な觀察に陥りやすい。その際先づ傲慢でない程度に肩を張つて身體極めて強健らしく、天性頗る明朗らしく立ち現はれ、立ち振舞ふことは第一に委員の好意を戦ひ取る先決要件と云ふべきであらう。

第二はスポーツマンライクであること。何にしても新聞人は一種の接客業的商賣なのである人を相手に、御氣嫌を損ぜずにかも必要な丈けの事をしやべらせなければならぬ。それには現代で一番一般に人好きのするたちが良い。人馴れしてゐて、しかも無邪氣で、氣輕で、紳士の教養を失はず、言語が明晰で、スタイルが輕快で、婦人に親切で——この條件を満たすものは先づ所謂スポーツマンである。だから、誰にでもスポーツマンたれ、とは謂はないがスポーツマン見たやうであれ、と云ふ所以である。

大學出の一流スポーツマンには就職難なしといふわけは、その採用する會社が、自分の所に野球團を強くしたいから、といふ稀な欲望をもつ一二の會社を除いては、すべて前記のやうな條件に、スポーツマンがあてはまるからである。

第三は、試験委員を懇意な叔父さんか何かか何かに思つて了ふ、ことである。相手が一生の運命を左右する試験委員の前だと思へば、つい口も重くなつて云ふべき事も云はずに、或は云へず了ふ。氣輕な叔父さんだと思へば僅かな質問に對しても、充分に答へられるし、問ひつめられた時には、「そんなことを云つたつてそりあ叔父さん駄目ですよ」と云ふ枕言葉だけを略して、思ひ切つて反駁をしようといふ氣にもなる。そんなのが案外效き目があるのである。

だが、氣輕といつても、答として口で云ふ事であつて、動作は極度に氣をつけなければいけない。もぢくして胸のボタンばかりいぢくつてゐるのも見苦しいが、同時に叔父さんの前に居る氣で無暗に椅子をがたつかせたり、足をかさねたり、頬を片手で支へたりしないことである。これは失禮ださうだ。

次に眼のやり場が大切である。これは怖らく何よりも六ヶ敷いことだらう。同時に又、かなり自然に備はつた人格の最もよく表現される所である。どうしたら良いかといふことは各自が人と話をするときに良く觀察して自ら覺るべきものであるが、先づ問かけて來る試験委員に對して、返事をする間は殆ど相手の眼をおだやかに見つめるが良からう。おだやかといふのはた

とへば、戀人を普通に見る眼位のところと思へば間違ひない。話と話の間は相手の胸の邊位に眼をうつしてゐる。決してキョロ／＼眺め廻したり、眼を相手の靴や床の上に落してゐたり、天井の隅を眺めてゐたりすべからず。どんな場合でも、眼は口程に物を言ふものと思はねばならぬ。恐怖の色とか、狼狽の色とか云ふ顔色は第一に眼に現はれて來るのもわかる。

× 其他言語明晰とか、服装端麗とか、月並の注意はいくらでもあるが、考へればわかることだからやめる。

たゞ最後に、大新聞社の試験委員の要求する人物は年と共に變遷して來てゐるといふことを老へねばならない。つまり、新聞社の組織が漸次に變化して、大資本の經營となる、同時に編輯局の内部が夥しく分化して、細部にわたつて専門化し、同時に記者の仕事が甚しく機械化して來た現代にあつては、中央統制部の命令が、平記者の自由意志を殆ど全く無用視するに至る程絶對的な權威を以て、君臨してゐるのである。だからこゝに入つてこの命令の手となり足となる者は、昔話にきくやうな、一筆以て天下を横行し、權門勢家に節操を屈せず、といった風

の人間では使ひ難いのである。といつて無暗に權門や勢家に白晝膝ばかり屈してゐても社の體面にかゝはるから、そこを適度に調節出来る位に、ビジネスを心得た人間が、先づ重寶がられるものと思つて差支へない。

以上は極めて一般的な心得であるが、次には、實際の試験問題を中心にして、物語を繰りひろげて行くことにしよう。

30 新聞社入社試験物語、受験體驗の卷

ルンペンよ集れ！ の一聲に、千人からのルンペン諸氏が、立どころに、箒をかついでいと勇ましく、上野の杜さして集る世の中である。

「若干名募集」の大新聞の採用廣告に、數百或は千餘の希望者がワンサ／＼と押かけるに何の

不思議があらう。彼等とてインテリの四字こそつけ、ルンペンに變りはないのだもの。

學の蘊奥を極めたる學士をつかまへ、心安さうに、インテリ・ルンペン!? とさうムキになる勿れ、諸君はすでに、洋服屋か藥屋のショウウインドウで東大の卒業式の寫眞ニュースを見たことであらう。説明は曰く、「インテリ・ルンペンの首途」と。だから文句があつたら、僕よりもまへに、まづ寫眞屋に當るのが順序と云ふものだ。

で、さて、何にしても、記者志願者の多くなつたことよ、である。殊に、酔へば必ず「末は博士か、大臣か」てな、およそタワケたことを、牛肉屋の二階あたりでどなつてゐた、帝大の連中の、履歷書片手に、目の色かへて押出す數はすごいものである。明けても「優」、暮れても「優」と、「優」の數ばかり數へてゐた秀才諸氏よ、さまあ見やがれだ。

さて、新聞記者志望が多くなつた、これは事實である。

だが、こゝで一應「何がかくも多數の彼等を……」と分析をしてみる必要がある。世界的不況——就職難、これが一つ。新聞に對する理解が深まつたこと、これも一つ。新聞社は内部の空氣が、比較的自由なこと、これも一つ。だが、最後に、こゝでは學校の成績が餘

り物を言はぬ、これが頗る主要なる原因をなしてゐるのだ。「優」を追ふて、遂に「優」を得ずと云つた連中は、就職難のはけ口を、こゝに見出すのだ。新聞屋なんて今まで眼中になかつた。だが官廳、會社にゆくには「優」が足りぬ。一夜にして、方向轉換である。入社筆記試験に、常識試験で百點満點に十點から二十點そこゝをとる手合は、多くこんな連中だと思ふ。その上、日曜に下宿にゐても、つまらない。一寸試験でも受けて見ようか、と云つた彌次先生も相當ある。えび鯛、どころか、當つたらもうけ物位に思つてゐるんだから始末が悪い。結局千近くの志願者中、ほんとうに記者を志すもの、その幾割ぞやである。以て心ある士よ、實物に惑はされてはならない。

駄辯が長くなつたが、僕の言ふ趣旨は希望者も多くなつたが、又彌次も甚だ少くない、一概に新聞記者ばかりが、とびぬけて多くなつた、と云ふ世の通説に一矢を放つたまでである。

X

さてこゝいらで僕の體驗記なるものをそろそろ語らしてもらはう。その前に斷つて置くが僕は人並みにまづ一流紙中の錚々とも目されるA社をうけ、筆記にはどうやらパスはしたものの、

第二次で見事スカを喰された、ここで如何にして失敗せしや、であり、更に格を落してT社をうけてこゝも又「遺憾ながら」のすこぶる遺憾なる結果をうけとらう、R社に落着くことになつたのである。だから體驗談にはまづ兩様の使ひ分けの出来るうつつけの(？)資格者と、まあ一寸やせ我慢をさせてもらはう。

二月の七日と記憶する。所は日比谷公會堂、來るゝ、大學で一寸與太氣分のついてゐた連中は、貴様もかゝと同じ様なことを繰り返す程よく來てゐた。「圓タクを乗りつけたまではないが、音樂會に來た時たア、氣分が違はあネ」恥かしい野郎を友達にもつたものだが、僕の一友人氏はかうホザクのである。來るまでは左程にでもないが、いざ現場に來て朝刊で試験勉強の連中を見ると彼氏も矢張り受験氣分を出すと見える。A社は社是が自由主義とかださうでこれもその一端か否かは知らないが、受験者は勝手な所に坐るのである。到る所氣の合つた友人が固り合つた友人が固り合つて目白押しをする奇觀も呈する。

まづ最初は約十分間の講演を四十分にとめるのである。「世は就職難の時代である、然し失業必ずしも不幸と云へず、禍を轉じて福となす心こそ、まづ必要なれ……」説教に非ずその講

演の本筋である。それをせつ／＼と書かされる受験者の面のよさよだ。だが、文句は云つてゐられる時期に非ず。人事の様な面構へでせつ／＼と僕もかいたのである。経験によれば、講演の間は黙つてきいてゐて、数字が出たらよく頭に入れておくこと、筆をとつたら一氣かせいに書流すこと、もつともちよい／＼要點を紙片にかきとめてもよいが、そんなことをするとかへつて、かく場合に暇がとれる。こゝで一寸話とはぎれるが、この時一受験者のやをら立つて曰く「筆をとつてはならぬとの試験官殿に注意にも拘らず、私の見ます所によれば、往々講演中にかいてゐた方を見受けるのであります。試験官殿は如何なる御處置をとられる積りでありますうか」公會堂での政談演説に感心して、機あらばと待つてゐたのかも知れぬ。だが、頭に觸られてもならぬ程緊張してゐる場合、これは正に意識的妨害か、はた無意識的のそれにしろ、迷惑はこの上なした「馬鹿！」「引込め！」囂々たる中に彼氏は、一度見得を切つたものゝ、大衆に逆ふては形勢非と見たか、腰を下した。が、この飛入り講演に面喰つたのは眞面目な受験者であつた。

次は歐文和譯、英、佛、獨いづれたりとも勝手たるべし。だが大部分は英語にかじりつく。

こゝでの戦術は、だから、なるべく人のやらぬ様なもの、獨、佛に手をつけるのが得策だ。何故と云ふに數のあることだ、英語には相當の自信をもつ連中が多い。たが獨、佛には習ふ年限も短かくそれ程の差異もなく、おまけに英語に比して問題もやさしく出来てゐる。一體に新聞社の語學は、商賣柄、記事風のものが多い。試験勉強の特志家があつたらまづ外字新聞に目を通すことは非常な利益でもあらう。それにしても正確な解答は餘り豫期してゐないらしい。むしろ如何に日本語にかき直すかゞ問題だ。單語などを氣にする暇があつたら、今俺は日本語をかいてゐるかどうかに心を用ふべし、である。

どうも日土講習あたりで云ひさうなことをうけうりしてゐる様で氣がひける。こゝはこれで御免。つけ加へるがこの試験も四十分位だつたと記憶する。そろ／＼試験のあとで、その社の幹部氏は、語學は學校によつて非常な差別があるかも知れぬ。だからこれは餘り重きを置かぬとのことだつた。社によつて又違ふことでもあらうが参考までに更に一言する。

十分の休みが終つたと思ふと、サラ／＼と正面にはり出されたのが所謂常識試験の單語だ。十題を三十分、一題三分の割、だからその答の内容を推して知るべし。「流石は一流紙！」と先

輩が感心してゐた程問題は各分野に亙つてゐる。今は忘れたが、その中からあげて見ると、免稅點、ロンドン條約、豐作飢饉、七五三、霧社事件、國際觀光局、日本ライン、ウナ……。

その頃の新聞を注意してさへをれば、大抵は出来るし、よし當らずとも遠からざる程のものはかける。だが終つてからの話の中にはハタと手をうつ様な、秀逸も少くない。ウナは鰻の略は無邪氣でいゝが、湯女の轉じたるものは、うがちえてすこぶる妙ではないか。彼氏却々下情に通じてゐる。更に七五三ロンドン條約の比率と前提して、軍縮問題を論ずる議論家も多かつたが「シメ」と讀んだ江戸子は之又こつてゐるではないか。免稅點に引かゝつた連中が最も多かつたらしい。が僕も又その例に免れざる一人、は餘り氣が利いた話してもない。これは試験官を喜ばす唯一の試験ださうだが、餘り喜ばす様では、入社はまづ心もとない。

最後の作文は一時間。他に比して時間の長いことでその重要さを知れると云ふもの「何故に君は新聞記者を志望せしや」よくきかれる問題でもある。又おいそれと答へ難い問題でもある。こゝではまづ、するく立廻るに限る。鹿つめらしく問題にぶつかるとはまづ筆先を固くする。適當の與太を入れて、「僕は新聞が好きで」とか、裏からやんわり手を入れるが戰術として

は得と愚考する。「新聞記者の一要素は酒を飲むことだよ」、呑助けの惡先輩はよく忠告!? するが、これは又一理あると思ふ。酒を飲んで、くだをまく位の與太がなくては、記者商賣は勤まらぬらしい。だからウブな受験生諸氏が餘程與太を飛ばしたつて上には上がありで古狸氏（これ失禮な！）はピクともするものでない、らしい。だから與太るべし、である。A社ではこの一問だけであつたが、數題の中注意選擇などとあつた時は、出来るだけ與太の飛ばせる題を選ぶこと、而も尙餘り人が手をつけさうにもないもの、と心掛ければ策の上々なるものである。

この四つの試験は十時に始つて、晝飯抜きを通し狂言だ。「記者ともなれば、往々一食位は抜きにすることがあります」試験官氏はこれで文句を押へて、而も安くすませるのです。だから古狸と云ふのであります……。

七百餘人の受験者から、これで大部分をふるひにかけ、八十人が第二次試験をうけたのである。一週間の後である。第二次でまづ體格検査に、口頭試験だ。體験は上半身を見る頗る簡單なものだが、これが又曲者である。要は如何にして落すか、にあるのだから一寸胸のあたりが

怪しいとなるとまづ先は闇と心得ねばなるまい。前項の「受験者心得の巻」で筆者の「健康らしくせよ」はけだし至言だ。處女の如く、觸はればなびく（まさか）と云つた恰好は大禁物。ない肩でもなんでもウンと張つてどうだ、と云つた面構へをするに限る。運悪く風氣などのある場合はうつかりすると胸の病と見られることも、なきにしも非ず。醫者が感付いた様だつたら、さつさと風を引いてゐますと白状すべし。新聞社で最も嫌ふは胸の病なんだから。

これがすむといよく口述だ。十人程のどれも一癖ありげな試験官の前に引だされるのだ。全く我ながらみじめなものと思ふのもこの時だつた。入るや否や、「君履歴書を讀んでくれ給へ」自分のかいた履歴書がヤケに長く感ずる。妙にテレる、ここで聲を一段ふるはせて……はいけない。まづ下腹に力を入れ……である。すむのを待つて勝手なことを言つてくる。「君は經濟が得意ですか」「へい」なんてぬかそうものなら、えたりかしこしとばかり突つ込んで来る。はフラ／＼と後戻りでも困る、が知りません／＼と片意地下女のそれの如くでも始末が悪い。第一に自分の得意な方面に、さそひの水をかける事が大事であるが、知らぬものをゴマかした

り、ここで妙な與太を飛ばすは禁物。汝知らざるを知らずとせよ、知つてゐたら早速齒切れよく答ふべし。深く、長く、はかへつて足許を見すかさるゝことゝ知るべし。

こゝでゐて、相當入れ交り立ち交り、いぢめられたらまづ脈はある。採つてやらうとの氣がある時は、それだけいぢめつけて見るんだから。

所がである。幸か不幸か、僕は頗るいぢめられなかつたのである。點呼の時のその如く、面白くもない履歴書を一應讀んだのち、二言三言返事をしたと思つたら、「ハイ、君はいゝです」と來たのである。何がいゝものか、僕はこれ以來その社の幹部氏とも顔を合せる機會が更になくなつたのである。いゝにも意味は兩様あり、正しく僕の場合は、先方にだけ都合がよかつたのである。

僕のE社の體驗記はこゝでできる。いとも悲惨なる大切りよ！ ではありませんか。

X

ついでにT社における遺憾なる結果をつけ加へるのだが、かく程に急に我れと我身がいとほしくなつて、長々との追憶は辭令にならつて「同上」で、はしよらせてもらはう、脛にきずも

つ讀者もあらば「……人のいたさを知つて」もらひ度い。だが一寸ナンセンスめいて、微苦笑ものが一つある。新装なれるあのT講堂で、數百人がヒソヒソと待つてゐたと思ひ給へ。チリ／＼と合圖のベルがなり終るか終らぬに、前面のどん帳はスル／＼とあがつたのである。何事ぞ、と、見ればにくしや、そこには筆太にかゝれた、試験問題がはられてゐるではないか。これじゃ全く芝居にもならないじやないか。人を喰つてるにも程がある。で、繰り返す様だが結果はまことに遺憾であつたのである。

これでやつと、僕の失意時代の記録はすんだ。冬去りなば、春來るは世のならひ、とこれからは鼻唄交りで、一筆申しあげ度いが、見方をかへれば、流れ／＼と落ちてゆく先は、といとも憂うつなる浮草の旅物語りともなりさうなのである。だが御存じの通りの世の中で、まづ職につけたは身の幸、まづしばらく辛棒のしついでに聞いてもらうとすべえ。

X

こゝB社は公募はしなかつた。だが、どこからもぐり込んで來たものか百人以上のつは者がおしかけて來てゐた。試験の形はまづ筆記、次に口述、筆記はこゝも偶然か見習つたか、A社

とほぼ類似してゐた。もうこゝに來る連中は相當場數をふんだ慣れつ子であり、又妙に振られる癖がつきやがると、人一倍氣をつかふ人々でもある。

僕の隣りに座つた彼氏などは、いともその氣を遣ふ様、はたの見る目もいじらしい程なのである。まづポケットから十錢文庫のモダン用語字典なるいとインチキなる文献を取出し、これぞと思ふものを、せつせと別紙にかきとめてゐるのである。いざ問題が出て見たら、その中の一つ位はあるかもしれぬ、と千番に一番のカケ合なる、心細きカンニングの用意に、をさ／＼怠りないのである、讀者よ、徒らに笑ふを止めよ、かくまで彼氏の氣を遣ふ、そのいぢらしさを買つてやるべし、僕たるもの、又これにはソツポを向かざるを得ないではないか。果してうまく當つて、彼氏が入社したるや否や、だけは僕にも分らない。

今は白状する。A社受験の項で、戦術がどうかのうのと效能がきをのべ、しかもその御本人たる僕がスカを喰つてゐる、その矛盾を、讀者はすでに氣がついてゐることであらう、正に矛盾である、だ、がこの秘訣はA社、J社をふられてのち、經驗ある社の先輩との言をつきまぜてかきあげたものである、だから、これでその矛盾もさりと流してもらへよう。この秘訣の始

めて役に立つたのが、すなはちR入社の際なのである。故にである。如何にして彼はR社に入社せりやはどうに語つて了つたことにもなる。それでも構はぬ。もう一遍、なんて頭の悪いことを言ふ様では、それ入社試験はまづスカ組の部類ですよ、と一杯スカを喰して僕はまづ逃げ出すこととする。

31 テレヴィジョンの現在と将来

餘り以前の話ではないが、私がテレヴィジョン受信機を覗いてテレヴィジョン・イメージを観てみると、友人が「これの娯樂價值はどんなものかな？」といつた。これはどこかで聞いたやうな言葉だと思つたが私はやつと思ひ出した。

×

かれこれ四十年前に私はアメリカでエジソン活動寫眞機の最初の公演を見たことがある。映畫は西瓜を食べてゐる黒人の肩から上を寫したもので、約二三分間續いたが始終ちら／＼したり躍び上つたりする活動寫眞で技術も頻る未熟なものだつた。その時友人の一人が全然同じことをいつたのだ。それは一八九四年のことだが、その當時、映畫技術が一九三〇年迄にこれ程進歩しようと誰か想像し得たであらうか？

×

テレヴィジョンも今日それと同じ立場にあるのだ。現在に於ける娯樂價值は餘り高いとは云へまいが、今から十年後にどうなるかといふことを豫斷する程大膽な人はあるまい。科學の急速な進歩と（三十六年前には無かつたが）現在では容易に手に入る技術上の種々な便宜によつて、テレヴィジョンの進みは極めて急速であり、今後も急速に發達するだらう。

×

過去二ヶ年間に於るテレヴィジョンの發達は目覺しかつたが、豫期の如く、公開放送テレヴィジョンの開始以來大いにその速度を加へてゐる。テレヴィジョンといへばジョン・ロデー・ベ

アード氏の名が出るほどこの兩者の聯想は餘りにも有名で、今更呶々を要さぬことである。然しながら多數の特許申請者が各自に我こそ現代テレヴィジョンの創始的發明者だと主張してゐる今日だから、こゝに現在我國最大の科學者の一人であるジョン・アンブローズ・フレミング卿の卓見を引用して、此の問題の解決に資したいと思ふ。

同氏はいはれる。――

「ベアード氏は實際的のテレヴィジョンを實現し、現在並びに將來に於て偉大なる進展を爲すべき一新部門を、電氣學界に創設せる最初の人である」と。

×

周知の如く英國放送會社(B.B.C)とベアード・テレヴィジョン會社との接衝は幾分遲緩はしたが一九二九年九月三十日に遂に商議が纏つて、當日ブルックマン・パーク送信局からのテレヴィジョン試験放送が見事に開始された。それ以來、影像と音との定時放送が二つの異つた波長を以て行はれてゐる。前者は通常三五・三メートル、後者は二六一・三メートルである。

×

テレヴィジョンには幾多の難問題がある。此問題については、テレヴィジョンの有名なる權威者シドニー・A・モーズリー及びH.J.バートン・チャブル兩氏の近著「テレヴィジョンの現在と將來」(“Television, Today and Tomorrow” published by Sir Isaac)に詳し。

ベアード氏もいつて居られるが、現在の放送影像は首と肩の像とか、くつき合つて坐つてゐる數人の人とかいふ様な簡単な場面に限られてゐる。この制限は現在得らるる唯一の九キロサイクルといふ狭い波幅に起因するのだ。然し短波長による實驗が進行中だから遠からず他方面で解決が見出されるかも知れない。何故かならば、九キロサイクルの制限を脱し波幅は干渉の危険無しに百倍に増加し得べきであるから。又出来る限り多數のサイド・バンドを包容する爲に、比較的廣い整調装置が必要である。さもないと影像の精密度が――特に黒つぼい線や陰に於て――損はれるからである。

現在、ベアード式送影機からは毎秒一二・五畫が送影されてゐるが、ベアード氏は之を以て十分なりとしてゐる。彼は又活動寫真とテレヴィジョンは同一法則の適用を受けぬもの故。相互の類推は全然不可能であると我々に注意してゐる。テレヴィジョンは疑も無く全然新規な方

向に向つて發達するものであらう。

× 最近色々な改良が施された。初めて演劇の電視放送があつたのもつい近頃である。役者の肩から上が（ブルツクマン・パーク電視放送局から七十哩隔つたセント海岸で）かなりはつきり現はれたが、しかし、劇的成功とはいへないものだつた。とはいへ、これは同時に確かに一歩前進したものである。二年前に試みたとしたら到底かゝる成績は得られなかつたであらう。

× 茲に挿入した二つの寫眞を比較すればこの四年間にどんなに進歩したかゞ直ちに肯けることと思ふ。そして我々は今後四年間に如何なる事が起るか考へざるを得なくなるのだ。此の二つの寫眞は露出時間約八秒を要する爲、撮影に多大の困難を伴ふものであることも知つてゐて戴きたい。肉眼で見る電視影像は視覺の殘留性によつて、この寫眞のやうにカメラで撮つたものよりも、遙かに見よいものであることは勿論である。それでも尙ほ此等の定時露出撮影寫眞は電視映機の同期作用が如何にも優秀であり且つ殆んどハンテイングが起つてゐないことを立

證してゐる。

× 本稿執筆の日から數日後には電視界に更に一段の進歩が行はれる筈である。ロンドンのコリジウム座に於て五呎に二呎程のスクリーンによつてテレヴィジョンのデモンストレーションをする話が進行中なのだ。不思議にも此のスクリーンの大きさは私が三十六年前初めて見た活動寫眞のスクリーンの大きさとびつたり同じである。コリジウム座の影像幕は多分陸線によつてロング・エイカーのベアード電視放送場に連絡されることと思はれる。

× 此の電視幕は二一〇〇個以上のネオン・ランプから成立し、之が總てまた整光盤の役目をする一種の廻轉盤上の同期用閉器に連絡されるのである。此のデモンストレーションの成績は頗る良好で、大いに一般民衆の興味を惹き起すことゝ豫想される。娛樂價値は高く無いかも知れないが、しかしその代り其處には科學的興味がある。しかも初期の活動寫眞を發達させたものは疑も無くこの科學的興味であつた。三十年以前の活動寫眞には確かに娛樂價値といふものは

殆んど無かつたのである。

×
テレビジョンは現在の状態に於ても、確かに著しい科學的興味を持つてゐる。電視受映機の内部に、見かけは如何にも混沌とした線の集合が人間の顔になつて現はれてゐるのを見守る程、心の躍ることはまたとあるまい。

×
私は大膽にも今後十年以内に我々が、今日の活動寫眞のそれと同じ大きさのスクリーンの上に、同じ様な完全さを以てテレビジョン映像が投映されるのを見るであらうと豫斷するものである。

×
その最初の實行時代には多分中央局から首都區域に向けて、陸線によつてトーキー映畫を放送するといふことにならう。一方有名な劇等の拔萃も中繼されるであらう。その時分迄には完全な短波長送信が流行してゐることだらうし、主な出來事はあるの儘放送されるやうにならう。

×
今日私はベアード式電視受映機を覗き込んで、其處に單にシガレット・カードより少し大きい位の小さな映像を見るに止らず、その甚大なる將來の可能性をも認めるのである。此の發明の科學的興味を認めるのみに止まらず、近き將來に於るその偉大なる「娛樂價值」をも認めるのである。(レビュウ・オブ・レビュウ誌より)

32 新聞配達員と擴張

此の社會に何を求めんとするかと云ふに、自分は先づ新聞を求めたいのだ。正しき新聞に依つて現在の渾沌たる社會を救ふべき記事を求めたいのだ。自分は現在某新聞の配達をやつてゐる者である。

此處に少し配達員として述べさせて貰ふことがある。

新聞配達と云ふものは今迄苦學生に限られてゐた様である。勉強するために新聞配達をする
と云へば誰もそれに對して世評はなかつた様である。だが現在の新聞配達なるものは如何なる
ものであらうか。各販賣店の配達員募集をみると、成るべく販賣に經驗ある者を求むとしてあ
る。これはまさしくその新聞をより多く販賣せんがための或る方法ではないか。これらの擴張
販賣員を歓迎するのは大阪の新聞販賣店の特徴と云つて差支へない。昔は配達する傍ら勉強し
て自分自身の伸びるべき道に進んで行つたのだが、現在の配達員をみるに、皆それを一つの仕
事と考へ職業と思つてゐる。斯様なことは、不景氣の社會生活上からみればなんでもないこと
であるが、自分達の様に苦學を目的とする者に取つては大いなる脅威と云はなければならぬ。
何故と云ふならば今迄新聞配達なるものは苦學生と限られ、又それに依つて勉強が相當に出來
たのだが、販賣政策が一新され今迄苦學生の舞臺とされてゐた仕事がそれら専門家？のため
に自活の道をうばはれつゝあるからだ。全部の販賣店が皆然うだとは云へないが、此の傾向は
將來益々喰入つて來ると思ふ。所謂その専門家なる者は擴張もうまいそして可成りしつこく擴

張に行くものだ。これに對して苦學生の配達は餘りしつこく行かない。専門家？なる者の如
くすることは到底不可能なことだ。と云ふのは、お互ひに立場が違ふからだ。自分達が勉強す
る爲に働いてゐるのに對して、彼等はそれに依つて生活の道を講じ様としてゐるからである販
賣店にしてみれば紙數の増すこと程幸なことではないのだ。配達員に依つて擴張されたる紙數が
直接主任に及ぼす影響は可成大きいだから、今迄苦學生にのみ獨占されてゐた仕事はそれ等
専門家？の手に移るべきことは當然である。故に現在の新聞配達と云へば直ちに社會の人々
は、新聞配達なんてごろつきのなるものだと云つた様な斷案を下して仕舞ふのだ。

X

こゝにまだ一つの問題が取り残されてゐる。所謂擴張に對しての辨償なのだ。これは各店共
に激しい様だ。現在大阪の二大新聞の擴張部數をみると、朝日參拾部に對して毎日五拾の割合
である。自分達の恐れるのは擴張の豫告である。新聞配達制度を知らぬ者にとつて、この擴張
の苦痛なことは判らない、一家を持つ人であつておそらく新聞の一つ位讀まない家はないだら
う。東京の様に大新聞が肩を並べてゐると違つて、大朝、大毎何れかを讀んでゐる。勿論夕

刊だけの小新聞の擴張もあるが大して問題にはならない。兎に角關西の新聞界は二つのニュースに依つて決定されるのである。この堅い地盤をお互ひに切り開いて行かうと云ふのだから仲々苦痛だ。我々達にしても好き嫌ひは有る。まして見知らぬ人に向つてこの新聞が何うのあの新聞は斯うだなんて云へたものでない。實際眞實に云へばこの擴張なるものはお情で取つて貰ふ様なものだ。隣の家で取るから私の所でも取らうと云つた様な家もこの大阪に未だ存在してゐる。それ等の人々に對して何時も自分の思ふ事は、餘りに個性のない人間だと云ふことだ。斯う考へるとき新聞の擴張などと云ふものが無意義なことだと思はずには居られない。自分達が一生懸命擴張した家で二ヶ月取つて呉れる家はまあ絶無と云つていゝ。配達員を擴張させるのはいゝが、辨償させることだけは何んとかならないものか。擴張が出来なくて辨償する金額は大したものだ。此の位の部數なら擴張出来得ると豫想してさせるのであらうが、仲々出来るものではない。擴張の成功不成功にかゝはらず辨償させるのは餘りに不法ではないかと思ふ。こゝに、社會に對して言ひたいことは、もつと個性を生かして呉れと云ふ要求に外ならないのだ。我々は假令擴張に惱まれ、苦しまうとも、眞實新聞の價値を認めて讀んで呉れれば満足

である。お互ひに配達員としての苦痛もあり、社そのものに對して努力を捧げることは念頭に置くが、不法なる新聞經營者に對しては、我々も起上らなければならぬ時が來ると思つてゐる。時代は急速に流れてゐるのに、何故新聞配達員は向上しないのか。新聞社と讀者とはかなり隔りがある。だが讀者對配達員との關係はどうか？新聞社そのものを生かすことは一つに配達員に掛つてゐることを忘れてはならない。

33 雑誌の投書から成功した話

所謂、草深い田舎、その田舎に僕も三年の間幽閉？された生活を送らねばならなかつた。××省（特に秘す）向きに造られた「學校を卒業はしたけれど」僕は「思想上云々」とにらまされて、どよのつまりが草深い田舎行と決定されてそれこそ恨み骨髄に達したものでした。どう

にでもなれ！　それがその時の僕の唯一のスローガンだったので。

一年半！　その間多くもないサラリーを土くさい料理店の白首共にたゞきこみ、それこそ思實なスローガンの實行者となつてしまつたのです。

『面白い方』とか『變つてるワねい、』てな言葉に僕は喜んだかと云ふと少しも喜べない。かへつて、どうすることも出来ない憂鬱に閉じこめられてしまふのでした。

『東君！　餘り料理屋あそびはしないでくれ給へよ、この體面にもかゝはるから。』僕のつとめて居た田舎の役所の親父が、こんな事をよく言つては、僕をしきりにイサメてくれたのですが、スローガンの忠實な信奉者であり實行者である僕は相變らず最左翼!!　杯を離さなかつたのです。

ある日です。うらゝかな秋の日、宿醉未だ醒めやらすと云ふ僕、役所のテーブルに乗つて居る××省協會雜誌と云ふ部厚な雜誌をめぐつて居りますと眼についたのは次のやうな大活字でした。

懸賞論文募集

一等賞金五十圓也

××省協會雜誌編輯部

その頃餘りに飛躍につぐ飛躍で少からず借財をこしらへた僕、食指大いに動いたのは争はれぬ、貧すりや鈍するのです。

『よし一つ借金うすめの足しにするかな。』うぬぼれ屋の僕でしたから、早速僕一流の名文を約二時間の間にスラスラ?　と書上げて無雑作にポストに放り込みました。そして矢張り僕は酒と女に浸つて左遷されたり、つぶんを晴さうとして居りました。

『東君!』又かと思ひ乍ら僕は親父のところに行くと、親父は官報を見乍ら僕と同じに卒業した友の昇進を話して又同じやうな説教です。

『いや、僕だつてこんな田舎へタタキこまれさへしなかつたら、彼等にまけるものですか。』

僕は口惜しまぎれにさう云ひ乍ら親父の室から、憤然色を爲して自分の席へ歸つたのです。友の昇進!　友の昇進!　僕は流石に感慙無量でありました。どうしてかうだらうか。僕は考へざるを得なかつたのです。

ある日もう櫻が咲かうと云ふ日、忘れて居た××省協會雜誌編輯部と云ふ嚴めしい角封筒の書

留が舞ひ込みました。

開封するとスツカリ僕は驚いてしまつたのです。宿酔のフラ／＼した頭で書き上げた僕の名文章？ が一等に、しかも五十圓になつて居るでは有りませんか。「さうだ！ これだ。」僕は獨り合點と例のうぬぼれから卓をたゞいて躍り上りました。それからの僕は打つて變つて勉強家になつたのです。毎日協會の雜誌に僕の名が活字になつて出るやうになりました。

ある時は猛烈な反對論でたゞかれたり、ある時はいとも優しき女文字のセンチ、メンタル、ラヴレターが飛びこんだり……。こんな事をして僕は草深い田舎の生活を送ることに一つの興味と、慰めと、それから勉強、とを得て暮すことになつたのです。××省協會雜誌と云へば、全國にその配布網を持つ雜誌でしたので民間には知られませんでした。役所と役所の間には知れた雜誌でした。

『東君、中央官廳で君をたのみたいと云ふのだが行く氣が有るかい』

僕は親父からこの言葉を聞いて夢かと許り驚きました。田舎に居てはドウしても勉強が出来ない。十の努力を田舎でするならば、都會では五でそれだけをなし得るんだ。都に出たい！

それが僕の念願でした。『行きます、行かして下さい』僕は勇躍して東京に立つたのです。

『君のお名も文章も毎日読んで居る。どうか大いにやつていたゞきたい。』課長は微笑み乍らさう云ひました。

つまらぬ文章が、投書が僕を昔の友と同じ位置につけてくれました。

『僕たちは卒業するとスグ茲ですつかり油をしぼられてヤツとこゝまで來た。君は田舎でしたいことをブラ／＼して居て僕達に追いついてしまつた。羨しい。』

僕の友人はお茶の時間や省線の電車の中でいつもこんな事を云つては僕に何かしらおごらせようとする。

然し僕は忙しい。勉強に忙しい。つまらぬこと乍ら原稿に忙しい。いつも／＼友人のおつき合ひ許りも出來兼ねて居る。

34 新聞の出来上るまで

ニュース集中の巻

市電氣局の局長室の前には、各社の記者連が全身を眼と耳にして、緊張し切つて群がつてゐる。

室内では今自治會代表と當局者との會見の最中だ。回答の如何では即刻全線の電車に運轉を停止するのだ。記者連はこれを夕刊に報ぜねばならぬ。

ドアが開いた。會見が済んで代表四名が顔面を硬直させて出て來る。

『どうでした』

『回答は何時です』

『いよ／＼總罷業決行の指令を發しますか』

記者連がガヤ／＼と代表を取り巻く。

回答は本日午後二時半——の發表がある。

今度は市電氣局幹部の協議だ。

『A君、僕はこつちで協議を探るから、君は早くこの自動車の後を追ひ給へ、本社への報告も僕がして置く。撒かれんやうに』

自治會代表の自動車を追つて、警視廳勞働係などと共に、新聞記者の自動車が二三臺逃さじと後に尾く。

リリリリリン、電話だ。

『あゝ、うむ、うむ、在郷軍人の動員令が出て、もうぼつ／＼集つてゐる？ ぢや罷業決行すれば直ぐ乗り込んで運轉するつもりだな。よし、では君は直ぐ大塚車庫の方に廻つて呉れ給へ』

新聞の出来上るまで

在郷軍人會本部へ行つた記者からの電話である。社會部長が直ぐ次の行動の命令を下す。リリリリリン、また電話だ。

『こちらは警視廳クラブ、今のところ、電線泥棒一件、家出三件、絞殺死體發見、火事二件です。原稿は今送りました』

ベルが鳴る。また電話だ。

『あ、もし、部長を一寸』

『自治會幹部と市電局との會見の結果結局回答午後二時半と云ふことになりました。當局の態度は依然強硬、無要求條項は全部拒否するものと思ひます。回答後恐らく即時一齊罷業決行の指令が發せられるものと見られます』

『當局が強硬なのは、在郷軍人會、青年團と何等かの默契が成つたからだ。在郷軍人は従業員の罷業と同時に乗車準備を固めてゐるやうだ。自治會側ではだから回答をはねられても、今度は恐らく電車は停めないで、うっかり夕刊は一齊罷業決行では行けまい。その邊のところを締切りまで確實に探つて置いて呉れ、自治會代表は直ぐ隠れるから尾行は手拔かりないだらうな』

『はあ、君が行つて居ります』

電線はかくてけたましく會話を交換する。

地方直通電話ではしきりに速記者がペンを走らせてゐる。

『某重大事件の首魁の一名にして豫ねて逃走中×××は本縣に潜入の氣配あり、縣特高課にて内偵中のところ、××群××町×番地××旅館に潜伏し居るを探知し、今×日午前×時縣特高課××警部を始め、數名にて逮捕に向ひたる所、×××は矢庭にピストルを亂射して——おい、一寸待つた鉛筆が折れた……、よしそれから——×警部は右腕に貫通創を』

社會部長は遊軍記者を呼びつけて叫んでゐる。

『この××警察署で飛降り自殺をした靜高生の家へ行つて親か兄弟の談話を取つて来て呉れこの通信をよく讀んで行つて呉れ——おい、コドモ、寫眞部へ行つて一人大塚車庫の女車掌の氣勢を擧げてゐるところを一枚撮つて来る様に言つて來れ、××君がもう行つてゐる筈だからと云つて』

夕刊の締切り近づく本社社會部は、かくて目まぐるしく轉展する。

X

『電報は電報でもあれぢや薩張り分らん、電報のつゞきものなんてのは餘り聞かないな』
外務省のクラブでは、日露漁業交渉に關して、日本が示した最後の解決案の回答を既にロシ
ア政府が發したにも拘らず、電文が少しづつ區ぎられて來る爲め、内容が容易に分らず大滾し
である。

『まあ、ゆつくり待つさ、どうして明後日のお晝ごろまで待たなけりや、イエスもノーも内容
は分らないんだ』

リリリリリン、

「はい、はあ僕です。電報の内容は明後日の午前十一時頃でなければ明瞭にならないのです
はあ政府としてですか、勿論政府としても回答内容が全部明瞭となつた上で方針を決すること
になつてゐる模様です、はあ、はあ、外相とは一時間ばかり前會ひました。はあ、原稿ですか、
今書いて居ります。もう直ぐ出來ます』

本社の政治部長からの催促だ。彼は無駄口を止めて原稿を書きます。

『廣田大使は××日午後五時（日本時間××日午前零時）十九日付の訓令案を提げてカラハン
氏と會見、日本の最後の解決案を手交して急速なる解答を迫つた、これに對しカラハン氏は—
—云々』

平常は比較的呑氣なこのクラブも、日露漁業問題の突發では、却々遊んではゐられない。

X

『指令は一齊罷業決行と出るんでせうが、在郷軍人や青年團の罷業破りに對してあなた方はど
うお考へになりますか？』

大塚車庫で××記者が、氣勢を擧げてゐる女車掌の一人を掴まへて口火を切つた。彼は市電
爭議の雜觀を書くのを命ぜられたのだ。

『あなたは誰方、スパイぢやないの？』

女車掌は、制服をつけてゐないものさへ見れば皆スパイだと思つてゐるらしい。

『大丈夫、僕は新聞記者ですよ』

『あゝブル新聞の記者、スパイだつて同じことだわ』

新聞の出來上るまで

何時も淑やかなサーピスのいゝ彼女等もけふの鼻息は當るべからずだ。それでも彼は立派にインタヴューを取つて了つた。彼女の興奮が、直ぐこんな風にまくし立てたから。

『サボタイジユなんかでは效め目がないわ、一齊總罷業で一臺だつて動かしたら恥だ。市民々々つて云ふけれども我々が生きるか死ぬかの必死な場合に、同じ無産階級たる市民大衆は恐らく少しの不便位を忍んで呉れるに違ひないのだ。スキヤツプに對しては男子従業員が自衛團を組織して飽くまで抗争しなければいけない。だが男は皆弱腰だから駄目なのよ』——と云ふ譯である。

パアとフラツシュを焚いて、女車掌のゼスチャがカメラに収まつて了ふ。

『あら、妾新聞に出されるの、困つちやふわ』

彼女は狼狽て、逃げ出して了ふ。

彼のけふの夕刊の爭議雜觀は、かく痛快な材料が一つ増えたのだ。『却々面白い』と笑ふ社會部長の顔が目にもちらつく——

X

『君、日銀利子引下げをX×新聞が抜かうと思つて八方飛び廻つてゐるさうだが、君は知つてゐるでせうな』

經濟部長が日銀の擔當記者を呼び出して確めてゐる。

『はあ、やつてゐるかも知れませんが、私はそれはそんな急の問題ではないと考へてゐます』
『しかし、何も根據なしにはX×でもそんなことはしないだらう。民間預金利下もあの新聞に抜かれたんだから、今度は充分に警戒する必要がある。早速關係記者全部を呼び集めて對抗策を取らねばならぬ』

リリリリリン、經濟部ではかくてこれから會議が始まるのだ。

『あすの朝刊は電力會社を三段で行かう。あ、X×君續きものの原稿未だ出てないやうだが』

『は、今書いてゐます、直ぐ出します』

『續きものは成るべく追込みで一日前に出して置いて貰ひ度いな』

X

自動車走つてゆく、一臺、二臺、三臺。最初の自動車は、自治會代表の自動車だ。續くの

は警視廳の労働係りと、新聞社の自動車だ。

一臺目の自動車は續く自動車を撒くつもりか態々交通頻繁の通りから通りへと、走つては降り、停つては走る。四辻のGO・STOPにぶつかると毎に、撒かれさうになる。

二臺目に續く彼は氣が氣ではない。撒かれた日には、社會部長にどの面下げて會へるのだ。その上、若しその爲めに、争議團本部から發する指令内容が、他社より遅くてもした日には何よりも彼の首が危険だ。

『運轉手君、何んでも彼んでも、あの自動車と距離を置いちゃ駄目だぜ』

しかし、間もなく彼は撒かれた。彼が泣き顔をしてかけた社への電話は次の如し、

『は、充分に氣を付けて追ひかけたのですが、海上ビルで彼等が降りましたので、私も降りたところ彼等は眞すぐ向ふ側入口へ抜け、其處に待たしてあつた自動車に飛び乗つて逃げました。は、は、丁度圓タクも其處は通つて居りませんでしたので、は、私ばかりでなく労働係も、他社の記者も皆撒かれて了つたのです。彼等は自動車の中で協議をしてゐた様に見られました。が、はは——』

×

『おーい、コドモ君、汽車便は未だか、もう行つてるか——』

地方部だ。地方からの電話は引つきりなしにかゝつて来る。

『××日午後五時、××郡××村字××番地から發火、折からの烈風に煽られて——オニ、馬、馬二頭焼死だな——』

『——オーライ、××山中に無残にも二人の子供を絞殺し自分は縊死を遂げてゐるのを發見した、原因は病弱を悲觀したものである——と、それだけですか、え、小火？　しかしもう入らないなあ』

×

社會部長は編輯長に呼び出された。

『市電の市内版はどう行きます？』

『他社では或ひは一齊罷業決行で行くところもあるでせうが、私は電車は停めまいと思ひます前例に懲りてゐますから、争議團幹部は今度は多分電車を明け渡さずに、サポタージュで行く』

んだらうと考へるんです。私は思ひ切つて『全線サボタージユ』で市内版をやつて見やうと思ひますが』

『確實にそれが分るにはどの位の締切りを遅らせたらいいんですか？』

『さあ、確實には二十分も遅らせねばなりません』

『二十分遅れたら困るな、ぢや、それで行つて見ることにしませう。だが、確報の方を充分急がして、若し違つてゐたら矢張り組み替へなければならぬから』

『は、充分心得てゐます』

『君、序に一寸整理部長を呼んで呉れ給へ』

×

『どうも原稿の出が遅いな、もうそろそろ締切時間だと云ふのに——』

整理部では、各部からの原稿の出が遅いのを滾す一方、一生懸命に見出しの文句で頭をひねつてゐる。

『君、この見出しはどうもびつたり來ないな、若槻さんもこればかりは——何とか他にない

かな。『若槻さんに禁酒勸告』として初號にしよう、この方がいゝだらう』

『もう二面はいつばいだらう、これでドンとしよう、さあ大組みだ、君一寸行つて呉れないか』

社會部から市内版のトップ記事が來た。整理部の擔當員は急に緊張し出して見出しをつけ出した。

「要求遂に斥けられ全線サボタージユ」

特初號四段抜きの大見出しが工場へ送られる。これで漸く夕刊の最後版——市内版は一應締切られた。

『寫眞部製版は未だかね、未だつてアト何分位ぬかゝる？ え？ 二枚とも』
寫眞部催促の電話だ。

×

校正部では各自皆赤筆を握つて一心に誤植校正に餘念がない。黙々として筆を動かす者、互ひに読み合つて引合はすもの、此處に電話も餘り用がない。

リリリリリン、横濱からの直通電話。

社会部は未だ原稿は締切つたものゝ、市電争議の確報があるまでは未だ息もつけない。

『もしく、えつ横濱市電も嘆願書提出？ナニ、裏面に××黨の關東地方ゼネストの陰謀——そりや大變だ。夕刊はもう締切つたが一寸待つた』

脊後で之れを聞いた社会部長に叫ぶ。

『おい大組を一寸待たして呉れ、君、その電話直ぐ原稿にして呉れ、大至急だ』

電話を取つた記者に直ぐに鉛筆を走らせる。

『東京市電争議に刺戟されて前夜來動揺しつゝあつた横濱——』

彼の鉛筆にまさにフル・スピード。

リリリリリン、また電話だ。

『指令は見込み通り「全線とも怠業で戦へ」です。矢張り乗務した儘で、在郷軍人のストライキ破りに備へるものと見えます』

社会部長は初めて安心の溜息をつく、直ぐ編輯長の部屋へ！

横濱市電の原稿は即刻、全文三段組で見出しが付けられ工場へ廻送される。

×

植字部で文選された原稿は小組として校正を経た。既に二三人が工場の大組部に出張つて、大組を急がしてゐる。

大組はやがて紙型係へ移る。

強い壓力でこれを紙型にして鉛版部に移す。

鉛版部では紙型に鉛を流し込む。かくて圓鉛版が出来上る。——そして輪轉機にかけられた。

『あつ、記事差止めだ！』

この時、整理部は所轄署からの記事差止め命令を受取つた。

『昨×日の××縣に於ける警察官傷害事件は、新聞紙法第×條第項に據り、掲載を禁止す』
整理部長は、狼狽て、社会部長と編輯長に相談する。

『仕方がない、もう組み直す譯けにはゆかないその部分だけ削りませう』

編輯長の最後の斷案で、今や、輪轉機に掛けられた鉛版は、その記事の部分だけ削り取られ

た。

X

輪轉機はめぐり、一時間十二萬枚の超高速度輪轉機は、全新聞記者の成功と失敗とを、最高のスピードで紙面の上に印刷してゆく。

X

新聞はかくて出来る。

35 新聞の統計的解剖

「奉軍滿鐵線を爆破——日支兩軍戦端を開く、我鐵道守備隊應戦す！」昭和六年九月十九日の朝刊二面トップを特大號五段抜きにて、各社は市内版にこれを報じた。續いて市民のまだ覺め

きらぬ冷えた街頭に、號外賣りの、けたまわしい鈴の音が走る、電光ニュースを報ずるサイレンが鳴る、「奉天軍の計畫的行動……事件益々重大化……我軍北大營を占領す」新聞社は全社を擧げて非常總動員、白熱的ニュース戦線に立つた。翌朝刊には「滿洲の現地へ特派員数名出發、飛行機數臺急派」の社告が出る。特派員の豊富迅速なるニュースは刻々報ぜられる、奉天よりのセンセーショナルな寫眞は一氣に、京城、廣島を経て大阪に空輸される。大阪からは寸時にて東京に電送され新聞二頁大の號外は、これらのニュースと寫眞とを満載して街頭に現れる。朝刊に、夕刊に、號外に、電光ニュース等々めまぐるしい驚異の裡に、日支衝突事件の映畫第一報が来る。讀者その他の大衆はホールに小學校に、郊外の廣場にこのニュース映畫を追ふてゆく。

かくて大資本の新聞社はかうした目覺ましい活動が出来るが、小さい新聞社は、かかる非常時には特に手も足も出ない、哀れな状態に立たなければならぬ。

X

毎年七八月の頃は事件や問題の少ない期節であり、従つて新聞紙は最も平凡な閑散なもの

なるのが常である。私は或る必要から、この最も閑散である。而して實際においても閑散であった。昭和六年八月一ヶ月間の、市内版朝刊に現れた東京五新聞の通信ニュースの数を調べたこれは、外國電報、支那朝鮮、内地各地よりの通信記事の数であるが、それは次の如きものである。日支事件のあつた九月以後の統計をとつたならば更に著しい数字を發見するであらう。

ニュース件數別

	外電	支那	内地	合計
東朝	二六一	二〇二	五一五	九七八
時事	二七二	二〇一	三四五	八一八
東日	二四四	一八八	三五四	七八六
國民	二一一	一八五	二六二	六五八
報知	一八二	一三七	三二五	六四四

これによると東朝が總數において、斷然群を抜いて居り、最も少ないのは報知である。合計から見て國民、報知、東朝とを比べると、前二社は後者の三分の二にしか相當しない。以下の

小資本新聞との比較はほど想像することが出来る。時事新報は何故東日より通信記事が多いか時事は傳統的に、外電支那電を多く紙面にとり入れる風があるがその結果であるとは前表に見る通りである。

この數字は記事の量を示すだけのもので内容實質に觸れてないが、ニュースの質について速度については各紙を比較すれば明瞭である。

尙注意すべきことは、右表の外電支那電のうち、東朝と東日のものは、その三割がその社の特派員の發するもので、時事、國民、報知は僅かの例外を除いて全部、聯合か電通かのニュースであり、その取捨撰擇は編輯者の考へに依るだけのものである。以上の數字に依つて大資本大經營の社がニュース戦線において如何に力を注いでゐるかほど明瞭となるであらう。

X

次に同じ八月中の東京五社の全記事事件數の比較を表示して見る。尙もこの統計は記事の性質によつて經濟にとるべきか内政に入れるべきかなど極めて判斷に迷ふ記事も少なくなかつたが大體の主流を覗ふことは出來よう。

合計	一、四四五	一、四五一	一、七七七	一、二九六	一、四三三
總計	三、七五五	三、六九六	四、〇七二	三、四四四	三、四三三

右の統計は五つの新聞の一々の記事の内容の比較ではないから、その主張の力點を知る方便にはならないが、どんな種類の記事に重點を置いてゐるかを大體察知することは出来る。たゞこれは八月の統計だから運動記事や航空記事が多く、反對に政治記事が少い。季節によつてさうした記事には多少の變動を免れないが、右の表の一々について五紙の比較を少し注意深く眺めるとそれらの新聞の持つ特徴がはつきりと語られて仲々興味深い。

一般讀物と名づけた所は、最近各紙が特に擴張したもので、これが新聞の雑誌化と稱する所謂のものである。寫真や漫畫の多いのも近年の傾向であり、讀む新聞から見る新聞への推移の一斑を語るものである。

X

次に今度は、記事と廣告との段數を比較して見よう。

昭和六年八月記事と廣告の段數

新聞	總段數	記事	廣告
東朝	五、三六二	二、七二五	二、六三六
東日	五、四四四	二、七一九	二、七二四
時事	五、二七六	三、一〇一	二、一七六
國民	四、八三六	二、九五五	一、八八〇
報知	四、五七六	二、五〇三	二、〇七三

總段數は即新聞の總量であること、これが第一位は東日の五、四三〇段、これは頁數にして四百十八頁を有し、最下は報知の四、五七六、頁數にして三百五十二頁

記事の分量の多いことは時事の三、一〇一段最も少ないのは報知の二、五〇三であるがパーセントで記事の最大は國民の六一・一〇である、これは國民が廣告の最も少ない事を意味するもので表の示すが如く廣告の率が最下位にある。

とも角も、全體に於て、記事と廣告との段數は殆ど半々といつてよい。

だから読者は一寸気がつかないのだが、毎日の新聞で半分は広告を買はせられてゐるのである。新聞製作の秘密も、新聞経営の謎も、つまり企業としての新聞の一切のからくりは、この統計に於て、その基本的な姿で語られてゐると云つていゝのである。

36 レビュー・オブ・トピックス

求職階級の女性の讀む新聞、雑誌

野球シーズンになると都下各新聞の夕刊にそのスコアが出る。こゝで素人讀者が不審を抱く一事がある。それは日本一を誇る『朝日』『日々』兩紙がせいゝ第二回か、第三回戦の表までしかそのスコアを掲載してゐないのに、二流三流の新聞が、第四五回までのスコアを堂々と載

せてゐることだ。

知らない讀者は思ふ。二三流新聞の方が却つて高速度の輪轉機をもつてゐるのだろうか？ 従つて夕刊の締切時間を遅くまで延ばすことができるわけなのだろうか？

併しそれは簡単な理由なのだ。即ち市内版の数が少いのだ。もつと詳しく云へばその二三流新聞は市内版を配布すべき讀者が極少數で、餘りたくさん印刷しなくてもよいので、より劣勢な輪轉機を以てしても、締切を遅くしてもガラガラツと印刷を終へてしまふことができるからである。だからリーグ戦の戦績を見るため夕刊を買ふ野球ファンは、大新聞を買ふよりも二三流新聞を買つた方がよいわけであるが、スコアの多く出てゐる新聞はそのことによつて自分の新聞の優勢を誇る何の理由にもならないのである。

×

新聞の發行部数は日本では各社の秘密で——アメリカ等では廣告主から成る機關が各新聞の發行部数を調査して、そのサーキュレーションによつて廣告料が決定されてゐるさうだ——本當のところは知り難いがどんな人達が、どんな新聞を一番讀むか、或ひは讀まぬか？ といふ

ことは興味のあることだ。それについて最近ひよんな機會でそれを極く大略だが調べた。

それはデパートのショップ・ガールを志望する職業戦線の女群がどんな新聞を最も読んでゐるかといふ面白い調査だ。今年の夏、東京府の飯田橋知識階級職業紹介所が女店員を募集した何でも三四の新設デパートが千人ばかりの女店員を募集するといふので、求職女性が堤を切つた洪水のやうにドツと押し寄せ、世の男性の經濟苦がかくも女性の肩にのしかゝつてきてゐるのかとセンセーションを起したものだつたが、その時の總數が東京の市内及び近郊の家庭にゐる人達だけで一萬四千人に達した。

カードを作つて色々な項目についての調査があるのだが、その中に『どんな新聞を読みますか』といふ一項がある。

その結果によると『報知新聞』と『毎夕新聞』が嶄然頭角を抜いて兩方とも各々全體の三割を占めてゐる。その次が『日々』、『時事』、『朝日』の順位で『都』や『讀賣』は全體の上に薄くばらまかれてゐるといつた調子だつた。

何と云つても野間清治の報知新聞、ノマイズム、キングイズムがこの種の求職階級には一種

意氣投合するものがあるらしい。殊に下町の職工とか、小商人の娘達は大部分報知の讀者だつた。必ずしもこの女性達が報知の愛讀者とは言へぬが、その女性達の屬する家庭は報知の愛讀者だつたのである。感激的な美談新聞であり『日曜報知』附きの景品奉仕があり、そして軽い川柳をのせて江戸ツ兒式な味附をした報知にさもあるべきことゝ想像される。

この報知に全く匹敵するものが『毎夕』であるには驚かされた。その讀者層は江東方面の土工、労働者等の家庭で、毎夕式の煽情的な赤裸の強烈な刺戟がこの生活層の心理に投ずるところあるのであらう。缺食兒童の最も多い深川大富小學校の兒童達の家庭でも新聞といへば『毎夕』と『同情週刊』をやる朝日より他に知らぬといふ話をその方面の人から聞いたこともある。

『日々新聞』の讀者は相當に多く二割半から三割近くだつた。これは新聞が派手だといふこと他に、市内販賣組織が、岩月販賣店と直配とのチャンボンで不統一な朝日より完備してゐると、新聞の高邁なる高等販賣政策よりも、實際の配達が親切でソツがない、たとへば雨降り

消息通専らの評判である。

その次は『時事新報』の約一割で、これは商工階級に多かつた。

最も少いのは『朝日新聞』の一割弱で、これは職業婦人に娘を出さねばならぬやうな家庭では朝日は讀まない。朝日はインテリでなくては讀まない又讀めない高尙(?)な新聞だつたといふ結論になる。

次に雑誌の方面ではこれら求職女性の間では博文館系統の雑誌は没落して殆んどなく、講談社系のものが八九割の多数を占めてゐた。

これらの調査はデヤーナリズムの世界に興味ある一石を投ずるものであらう。

新警視廳の建物がニュース取材に及ぼした影響

建物がニュース取材の難易あることは非常なものだ。吾々が新聞の仕事で以てどこかへ行つた時には必ずその地勢や建物の模様——殊に通信連絡について見定めておき、第一にはこの方法、これが駄目の場合は次の手段と豫め調査し、要すれば手配して置くのである。それは軍

隊の陣地侵入の偵察等と同じで、この調査手配能力がデヤーナリストとしての重要な資格である。と同時にこの事たるなく、困難なことで色々な場合に於ける廣い經驗と緻密な頭腦の働きの必要とすることである。

それはさて置き最近警視廳が宮城前のバラックから櫻田門前の新廳舎五層樓に移轉したことは日比谷記者會にとつてその取材方法に厄介なる大變革をもたらした。

舊警視廳は細長い一棟の建物で名物の十町廊下が一本走つてゐるのみ。しかも記者室はこの廊下を一目に見通しのできる一端の部屋と、丁度中央の一室との二つあつてどんな事件も記者先生お目に止らぬものはなく、まるでお關所の如きものだつた。

それが今度は取材の職場が立體的に上下左右八方に分散してしまつたので今までのやうなわけにはゆかず戦術を一變せねばならなくなり、當分は記者が足を棒のやうにして上を下へと走り廻つても事件が発見できずに暗から暗に葬られてしまふ事件が多くなることゝ察せられる。

最初は新廳舎の記者室を四階にといふ事であつた。ところが四階は警視廳記者にとつては餘り重要でない衛生部があるので活動に不便なので、交渉の結果、警視廳の心臓をなす刑事部の

ある一階に一室を占めることゝなつたものである。

こゝで新廳舎の大體の構造を説明すれば大體に於てA字型の五層樓で留置場になつてゐる地階とともに六階だ。一階はAの頂點の所が正面玄関で、左邊が刑事部や鑑識課、右邊の一番隅つこの一端が記者室である。兩邊を結ぶ中廊下は留置場になつてゐて通り抜けまかりならぬので、記者は三四丁の廊下をぐるりと遠回りせねばならぬ。それに二階も重要な保安部全部と刑事部長の部屋。三階もこれ又重要な官房と警務部と總監の頑張つてゐるところ。それに四階が衛生、五階が會議室、食堂になつてゐる。犯罪捜査の細かい細胞組織から成る一大機構が出来上つたのだ。

何しろ舊廳舎の廊下のやうに一目千本といふわけに行かぬ。出口はいくらでもあるデパートの中で泥棒を追ふやうなものである。舊廳舎では二三ヶ所固めて置けば、根氣と第六感さえあれば、どうにか水も洩らさぬ警戒はできたものだつた。大きな刑事事件になると鑑識課の出動等によつてそれと察せられるのだが、今度は數多くの出口の外地下室からさえ外へ出られるのでそれらのウオッチが容易ぢやない。大疑獄事件でも突發したら裁判所、検事局は直ぐ隣りだ

し、それこそ手も足も出なくなる。警視廳と裁判所その間に地下道を造るといふ噂がもし實現しでもしたら尙更のことである。

とにかく各部にザツと當りながら一周りするのに二時間はタツブリかゝる。同じ社の同僚が朝出勤して『ヤア』『ヨウ』と逢つたきり、中へもぐつてしまふとそれつきり一日逢はずじまひになつたりしてチームワークとしての連絡が不充分になる。舊廳舎では廊下で何回もパツタリ會つては打合せができたのだつたが、それに所謂『中へ入つたら』最後、記者室へは滅多に歸つてこれないので本社との電話連絡がとれなくなる。しかも大事件はよく他から本社に入つたヒントによることが多いのだ。これらの事態に處する爲めにはどうしても人員の増員が必要になつてくる。驚くなかれ、警視廳詰りだけの記者が、東京日々、時事、國民が各々六人、電通が五人、朝日、報知、聯合が各四人で、四人の方では近く増員の筈だといふ。

もう一つの困難は『事件の香ひ』といふものが、あれだけ大きい建物になるとしなくなることだ。警視廳の幹部の動き、刑事の出勤といふやうなもの、或ひは又、他の新聞社の事件を捉んだ時の雰囲気といふものがテンカラ分らなくなるので所謂『事件を抜かす』といふ事が多く

なりさうだ。

更に舊廳舎では夜でも各部屋に自由に入れて他社へは秘密の電話をかける事件ができたが、新廳舎では夜は嚴重に鍵をかつてあるのでその便宜がなく、又宿直警官が宿直部屋でどんな電話をかけてゐても舊舎の時のやうに筒抜けではなく絶対に聲の洩れぬ部屋になつたからどうにもならず、夜中の突發事件などに對し取材が頗る難しくなつた。

各部各課の部屋にしても今までは部課長が部員と同じ部屋にコミでゐたから面會も自由だつたが今度は部課長は全部、室が獨立したので一々名刺を通して御用濟を待たねばならぬといふスピードを生命とする記者にとつて誠に間の悪いことになつたものだ。

併し乍らこれらの爲めに警視廳當局は新聞の素速い素破抜きによつて事前にことが暴れて捜査の妨害となつたやうな弊害はなくなつて、當局にとつてはホツと一安心であらう。その代り新聞は面白くなるかも知れない。又警視廳の仕事が鋭い新聞記者の目を免れて秘密が完全に保てるやうになる結果、警視廳の活動が従來も屢々その例があつたやうに政黨的その他種々なる情實的に不純になる事等の弊害も十分想像されることである。してみると『建物』も恐ろ

でしいものがある。併しどうせ新聞記者だ、今にどこかの壁を突き破つて、巧妙な新戦術を考案することであらう。

ラヂオ・ニュースの新聞への挑戦

ラヂオ放送が日本で初めて開始された頃『ラヂオは新聞にとつて代るだらう。新聞は將來ラヂオにノック・アウトされる。いやラヂオと新聞は全く別な機能をもつものだ。いや新聞は單に記録として保存用にされるに止まるに違ひない』など、甲論乙駁、それも新聞道に於ける著名な權威者までが新聞の興廢の秋とばかり、眞面目になつて論じたものだつた。それも昔語りになつて、今ではもうそんな幼稚な議論を吐く人がなくなつた。

それにしてもこの頃、ラヂオ放送のニュース戦線への挑戦はなかく、眼醒ましいものがある。

たとへば最近の話ではリンドバーグ夫妻の霞ヶ浦着水の中繼放送である。この時、リンドイの着水は初めの豫定では午後一時前後といふのが遅れて二時頃になつた爲め、各新聞社は夕刊

の締切間際のため大いに驚いた。御承知の通り、あゝいふ事件の新聞通報には合法的方法では現場と本社との豫約電話を二三通話づゝ殆んどひつきりなしに數十本申込んで置くのであるが、それが豫定の時刻を中心に集中されてその他は疎らになつてゐるので、到着の豫定が狂つてくると、ギリギリギツチャクの締切間際などには思はぬ不覺に陥るといふ結果になるかも知れない。それにこの電話といふ奴が到着の現場などゝ多く離れてゐるので、大抵電話と現場との間は自動車とか、旗信號とかの方法によらなければならぬものだ。又この種の時間的に際どい事件は大抵豫定記事が既に活字にされてゐて、たゞ實際の正確な時間をその日の天候と突發事件等とを後から加へさえすればよいやうになつてはゐるが、何と云つても机上に空想して描いた記事よりも、目のあたりまざ／＼と光景を見て書いたものに、その實感に於て、そのフレッシュネスに於て、如くはなしである。

それらの點に於てラヂオの中繼放送は、斷然新聞通信を遙かにリードし、新聞は到底勝ち味がないのである。現實に於てリンデイの霞ヶ浦着水の實況は各社とも編輯室内に設けられたラヂオ放送によつて豫定原稿を書き直したさうで、このため各社から多數の記者が霞ヶ浦に出張

してゐたことがその意義をかなり薄くした結果になつたのである。

又一九三二年八月、ロサンゼルスオリンピックにはJ O A K がその現場から直接日本に放送することになり既にその試験放送に成功したが、この事實はニュース戦に於てラヂオが新聞事實を追撃する一大巨砲で恐らくニュース戦に一エポックを劃し、ラヂオの新聞征服史の一頁を華々しく飾るものとなるであらう。大毎大朝ではこのオリンピックのために特に特派員を今春から派遣したのだつたが、オリンピックの實況が今日の六大學野球リーグ戦の中繼のやうに時を移さず刻々と目のあたりに日本へ放送されるんでは、兩大新聞の優秀な大記者もタイプライターを郵便局の玄關口に叩きつけて、このニュース戦には手も足も出さず長嘆息する結果となるだらうことが興味を以て想像される。

放送局ではとにかく最近ニュース戦へと著しく觸手を伸ばしてきた。A K ではニュース班が今まで僅か三名しかなかつたのを、この九月七名を増員して拾名とした。この中には新聞記者たりし人が四五名ゐるが、A K のニュース網を敏活にし、充實しようといふ計畫なのである。放送局のニュースは従來聯合及び電通兩社の通信より成る所謂『放送局編輯ニュース』と各新

聞通信社交替の提供ニュースとだつたが、今度は放送局専属の記者の活動によつてニュースを集めようといふのである。

その計畫によれば新聞記事にヒントを得た興味ある事件に對しては放送局の記者が調査してより詳しく面白く報道したり、又新聞を出し抜いて放送局の特ダネをラデオファンの耳に吹聴しようといふのださうである。又更には興味ある全国的ニュースを放送局に知らせてくれたファンに對しては薄謝を呈するといふ内規もあるとかで、放送局のニュース熱は、新聞記者出身が多數ある餘熱からでもあらうが盛んなものである。

これは確かに面白いことである。と同時に罪のない演藝放送など、違つて放送局が對社會的に大きな責任の主體となることは當然覺悟せねばならぬ。調子に乗つて穿に落つこちはせぬかと心配される所でもある。又新聞社の全国的通信網に對抗して、全く責任ある通信網をもたぬ放送局が、かくまでにニュース戦に積極的に進出するのは無理とも思はれる。

が何と云つてもニュースを捉んだら最後、時々刻々に全國に向つて、殆んど時間と空間の制限なく報道できるのだから、その威力や大きい。この上更に、放送局が任意の時に、突發事實

を報道するため、いつ如何なる時でも突然、聴取者の注意を促すことができるやうに出来ればそれこそ大したものである。筆者の考へではそれは唯今でも可能性あることと思つてゐる。

リンデイと根室ニュース戦

リンドバーグ機が北海道根室に着いた時には——日本の新聞があれだけの大騒ぎをしたのが妥當か否かは別問題として、何にしても不便な僻遠の地のことなので色々特色あるニュース戦が戦はれた。

根室、東京間は汽車で四日かゝる。従つて各新聞社の『北海道版』といふものは北海道に起つた地方的ニュースは全く紙面に掲載しないことになつてゐる位ひだ。何故ならば、各社の北海道版も北海道に輪轉機があつてその地で直ちに印刷配布するのではなく、ニュースは一度東京社の通信部に報ぜられ、そこで印刷されてから、さて徐ろに汽車に積み込まれ青森で船に積みかえられ、更に汽車に揺られてゴトン／＼と運ばれるといふ超々スピードで爲されるのだから、大抵のニュースは四五日も経過して腐つてしまふ。それで當然その地の地方小新聞に負

けてしまふわけで、現在の状態に於ては北海道樺太版の紙面を埋める記事はその地に起つたニ
ユースは全く度外視され、専ら東京に在る北海道廳、樺太廳、その他拓務、商工、農林、内務
等各省に於ける北海道樺太關係の記事のみを以て充實してゐるわけなのである。

こゝで當然起きてくる問題は、然らば北海道に輪轉機を備えつけて、そこで編輯印刷したら
いゝではないかといふ理窟なのだが、悲しい哉、北海道まで西日本に於ける門司の如くそれほ
ど開けてをらず又朝鮮、滿洲、臺灣の如き販路を近くに控えてをらず、到底それだけの設備を
しても今のところ採算がとれぬのださうである。この輪轉機問題か、或ひは東京で印刷した新
聞を飛行機で輸送することにでもなるかしなければ『北海版にニユース無し』の現状を改める
ことが全く出来ないのである。

それほどに遠い北海道の片隅に起きたリンデイ機ニユース戦なのである。最も大切で而も困
難なのはやはり本社との通信連絡で、これには遞信省の命令で日本無電會社が特に落石おとしとの通
信連絡の任に起ち、又遞信省航空局が根室出張中の田中航空官からの情報を得る爲め、お手の
もの、無線電信で時を移さず瞬間的に無電連絡してゐたので、各社はこれで大いに助かつたの

だが、それでもやはり各社ともかなり非合法的な方法を策してゐたやうである。又リンデイ機
が千島の霧に惱まされて屢々不時着水し、それを救助した例の遞信省の新知丸がニユース戦の
獨壇場に活躍した時なども、同船が某社特別なる依頼によつて打電した『ウナニカ』（至急親
展）の電報が他の某社に横取りされたとか盗まれたとかの、ブラツク・チエンパーさながらの
怪事件もあり落石無電局までがやはりその渦中にまで捲き込まれんとする騒ぎまで起したこと
さえある由であるが、それからはずべて殆んど公然の祕密にはなつてをりながら、紙面にはハ
ツキリと書けないことばかりのやうである。

根室のニユース戦はそれらの前哨戦を終えて、リ機が一旦根室上空に現はれ引返して國後島
に不時着した頃からいよゝ、白熱戦となつた。さてこの島に幾日リ大住夫妻が泊ることになる
かは全く天候に依頼することが豫斷を許さない。そこで『朝日』は船を備つて暴風警報が出て
ゐるにも拘らず、記者と寫眞班が乗り組んで荒波を冒して國後に向つた。これを知つた『日々』
ではそれに同乗を求めたが、そこは不倶戴天の仇同志の競争社なので斷られた。『よしそれな
ら』と日々社も船を備つて出かけるといふ有様。こゝに面白のは朝日の備つた船は僅か五十噸

の物凄く船足ののろいボロ船で、日々社よりも数時間間早く出發したのに一時間位も遅く國後島に着いたさうだ。

所が今度は國後島では馬の競争になつた。リンデイ機の不時着水した沼はどうしても馬で二三里山奥に入らねばならぬ所だが、日々の記者は乗馬の経験なくトボくと馬背に乗つかつて歩いたが、朝日記者は得意の乗馬なので原始林の中をギャロツプと飛び続け、船で遅れた分を馬で取り返したさうだ。馬の心得も記者の一資格になつたといふ珍談も残つてゐる。ついでだがその時實はリンデイ機はもう出發した後だつたので寫眞班はせめて大佐が附近の百姓と繪問答をして魚肉にありついたといふり晝伯描くところの珍品『魚の繪』をカメラに収めて歸らうと企てたが、惜しい哉百姓の子供が『それなら鼻かんで捨てただよ』といふことで啞然とさせられたとのことだ。都會の人ならそれを表装して額にするとか、リンデイ・ファンに高價で賣りつけるかしたことだらうに。

リンデイがいよいよ根室に着いて記者團とインタービューすることになつたが、その時の氣の利いた芝居を見せたのは朝日だつた。同社ではアメリカ婦人の英語速記者を二名連れて現は

れたのだ。そして記者が自分でヨチ／＼とノートする心配もなく委細かまはずドン／＼とインタービューするのを片つぱしから速記し直ちに翻譯、本社に電話したのだつた。日本の新聞界では始めての試みでちよいと目新しいところだつた。

この根室ニユース戰を通じて最も目覚ましかつたのは何と云つても『朝日』の飛行機の活躍だつた。この飛行機のため同紙は朝に根室に飛來したリンバークの寫眞を、その日の夕刊に堂々と掲載するといふ離れ技を演じたのである。『日々』その他飛行機をもつてゐる社が何故それをやらなかつたかと云へば、それは極めて狭い離着陸地さえあればよいプスモス機といふ新聞通信上便利のよい小型新鋭機を他社にもつてゐなかつたからに外ならない。この時、朝日は根室にプスモス機を二臺、更に淋代に義勇號を一臺持つて行つて備えてゐた。リンデイの第一報寫眞を積んで酒井飛行士の操縦するプス機が根室を立つたのが八月廿四日午前八時三十分。淋代着が十一時廿四分。その時既に義勇號は地上運轉を開始してゐて酒井飛行士はプス機から飛び下りて寫眞を積み代え、大地の上に小便をして後、義勇號を操つて離陸するまでが僅かに二分間。十一時廿六分には離陸して午後二時五十分芝浦上空で寫眞を埋立地に投下待ち構えた自動

車が疾風の如く本社に運んで夕刊の紙面をその寫真で飾つたといふわけである。淋代で飛行機を乗りかえたのはプス機では根室から東京まで一氣に飛ぶガソリンが積みぬからで、他の二番機は同様根室から淋代に飛來、そこで酒井君が先に乗り捨て既にガソリンを積んであるプス機に乗つて東京に飛ぶといふ段取りだつたさうである。この朝日のホームラン・ヒットのため各社は多數の寫真班を根室に特派してゐたが汽車でガタゴトと東京へ運ぶのに四日間それより一足先にリンデイ機が霞ヶ浦に着いて東京入りをするといふ始末に、根室の特派寫真班員は全くその存在理由を失つてしまふといふ結果に終つたのである。

要するに新聞のニュース戦は、一つには知恵だが、一つにはお金の威力でもある。

耳と口を試験せよ

警察廻りの通報員と云へば、昔は餘り教育のない人ばかりだつたが、この頃では各新聞社とも殆んど大學出の人達ばかりである。しかも相當嚴しい試験によつてパスするのである。何か書かせてみれば、文章は巧いし、理論も通つてゐて、文章家であり、學者である人が多い。

ところが困つたことが後から判つて、どうにも困ることがあるさうだ。それは耳と口を充分試験しなかつたことだ。電話をかけると耳が悪くてこちらの言ふことが更に通じない。かと思ふと御當人の言ふことが訛りがあつたりドモリであつたり、喋り方の要領がトンチンカンだつたりで、何を云つてゐるのかサツパリ分らん。これではいかに頭がよく、筆が達者で、そして優れた第六感の所有者でも、どうも新聞記者には向きさうにない。

頭や手を試験しても耳と口の試験を忘れたのが採用者の手落だ。それでこの頃、標題のやうな金言が生れたんださうな。

新聞記者たる辛い哉。後世の新聞記者にはさぞ千手觀音の様なのが生れてくる事だらう。

新聞特種秘話

定價金一圓

昭和七年二月十六日印刷

昭和七年二月十九日發行

發行所

版權所有

編者

「綜合チャイナリズム講座」編輯部

發行者

松本清太郎

印刷者

齋藤廣吉

株式會社

內

外

社

東京市麹町區飯田町六丁目
電話九段三六六二
總社東京七六八四九番

内 外 社 新 刊 書

<p>勝利の記録 村山知義戯曲小説集</p>	<p>脈打つ血行 武田麟太郎小説集</p>	<p>赤い戀以上 徳永直著</p>	<p>輜重隊よ前へ 徳永直著</p>	<p>新らしきシベリアを 横切る 中條百合子著</p>
<p>題材を支那に求めて、メーデーを中心とした問題の戯曲、五月の築地小劇場の偉觀を記念すべき作品、しかも本書には「カットされぬ勝利の記録」が載つてゐる。以下七篇村山氏出獄後の作品は躍々として諸君の胸を打つてあらう。</p>	<p>地味で透徹した文章、しかも底力の強い反逆精神の汎濫だ。ナツプ切つての短篇作家たる武田氏の最近の代表的傑作十九篇を納めたものである。</p>	<p>「赤い戀」は現代青年男女の道徳になつてしまつたコロンタインが描いた一篇の赤い戀はあまりに理的で現實に生活してゐる大衆のものではない、戀愛はもつと苦しいものだ、本書は純然たるプロレタリア戀愛小説を描く。</p>	<p>關東消費組合聯盟全國農民組合茨城縣聯合會が労働者農民の消費組合運動宣傳のために徳永氏に依頼して書きあげたこれこそ眞實のプロレタリア小説の組織的生産に依つて生れたものである。</p>	<p>三年間ソヴェト・ロシアに生活しその國の民衆の生活に親んで來た著者が彼の地をあるがまゝに描いたのが本書だ。著者は女性としての觀點から報告者として全く素直にロシアを傳へてゐる。</p>
<p>送價 四〇六 一〇〇頁 版</p>	<p>送價 四〇六 一〇〇頁 版</p>	<p>送價 三〇六 一〇〇頁 版</p>	<p>送價 一四六 四〇頁 版</p>	<p>送價 四三六 一三〇頁 版</p>

10

5
4



Пролетарии всех стран, соединитесь!

23 ДЕКАБРЯ
1930

АМОВЕЦ

ГАЗЕТА РАБОЧИХ И СЛУЖАЩИХ ЗАВОДА «АМО»

Преодолевая трудности, преодолевая врагов, и новым успехам.

Доклад секретаря...

Большой успех в выполнении программы пятилетки.

До конца удачного квартала осталось 15 дней.

ЭЛЕКТРОЗАВОД

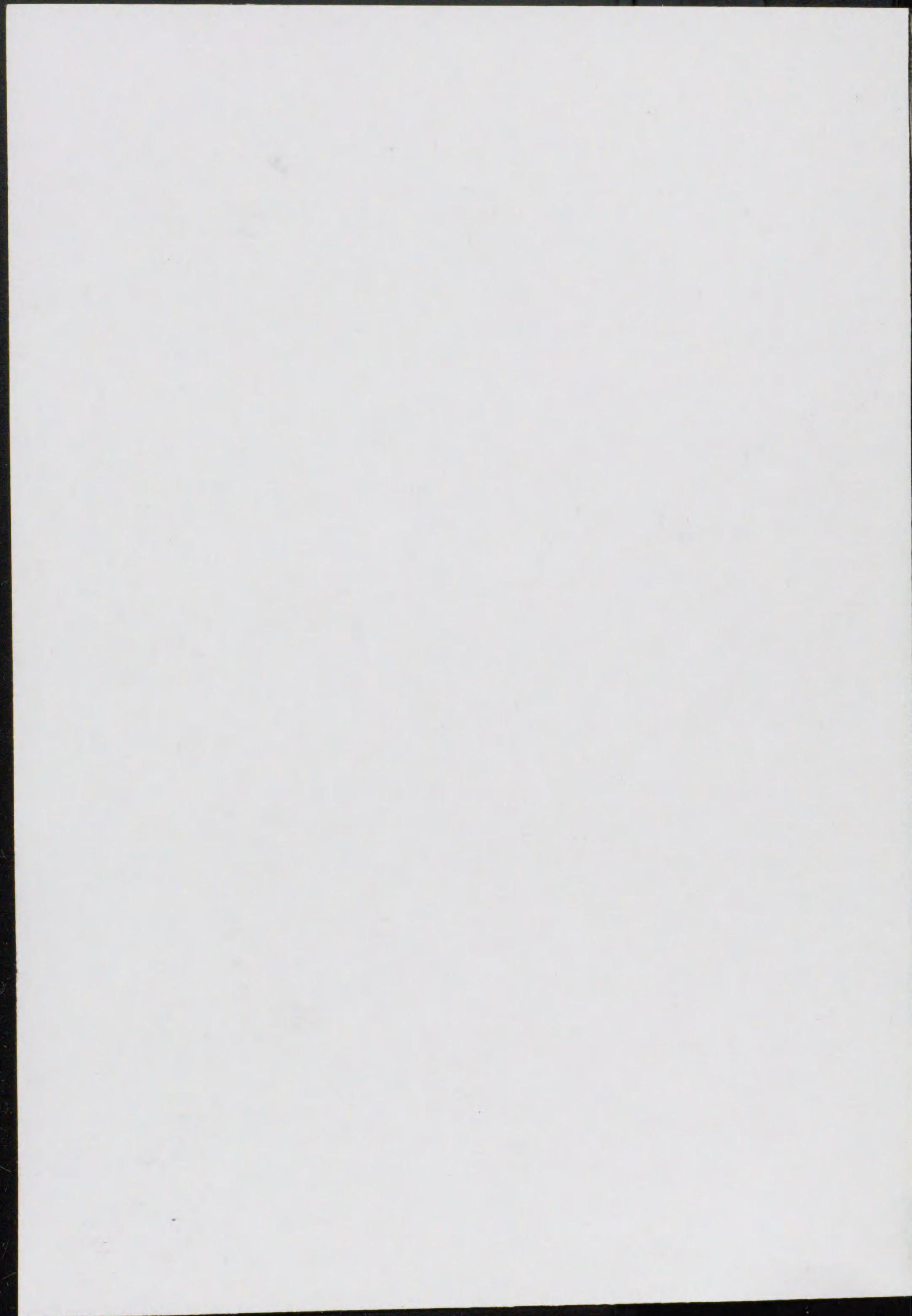
Ударного квартала.

Пятый год пятилетки.

ОКТАБРЬ № 31

Дунъя пролетариаты бирлешти
Y. I. O. O
内外社版

599
437

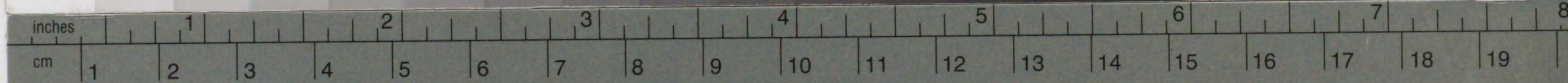


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

